

昭和 55 年度

埋蔵文化財緊急発掘調査概報

吉志部遺跡

垂水南遺跡

垂水遺跡

1981年

吹田市教育委員会

## 序

吹田市教育委員会では、大阪府教育委員会の御指導のもとに、昭和51年度以来、国庫補助事業として垂水南遺跡の発掘調査事業を実施してまいりました。今年度からは、市内全域における開発状況に対応するため、調査の対象を垂水南遺跡ほか2遺跡に拡大し、より効果的な成果をあげべくつとめてまいりました。

そして具体的には垂水南遺跡以外に、吉志部遺跡、垂水遺跡の調査を実施しましたが、特に吉志部遺跡は、本市でも最古の遺物を出土する遺跡であり、土地所有者の長期にわたる遺物収集活動にもかかわらず、正式な発掘調査がなされることもなく、遺跡の範囲、遺物の包蔵状況は全く不明がありました。今回の調査は、これらの状況を明らかにする積極的な対応への第一歩であります。

今後もこのような、市内各所の遺跡の範囲、遺物の包蔵状況の確認調査をつづけ、本市の全城について、開発行為とのすみやかな対策がたてられてゆくよう、努力する所存であります。

昭和56年3月31日

吹田市教育委員会

## 例 言

1. 本書は、昭和55年度国庫補助事業として実施した吹田市垂水町所在の垂水南遺跡ほか2遺跡の発掘調査概要報告書である。
2. 発掘調査は3次にわたりて実施され、遺跡名、調査地点、調査期間は下記のとおりである。

### 第1次 吉志部遺跡

吹田市岸部北1丁目302 番地ほか

昭和55年12月1日～12月27日

### 第2次 重水南遺跡（通算第20次）

吹田市垂水町3丁目32—50

昭和56年3月2日～3月31日

### 第3次 垂水遺跡

吹田市円山町370—3

昭和56年3月12日～3月26日

3. 本書の執筆は、吹田市教育委員会 藤原 学と調査員 山口卓也、調査補助員 増田真木があり、鍋島敏也がこれを補助した。

各章の執筆分担は次のとおり

1 藤原 学

2-1 藤原 学 2-2～2-4 山口卓也

3-1、3-3 藤原 学 3-2 増田真木

4 藤原 学

4. 発掘調査の実施にあたっては、関西大学 網干善教氏・同 考古学研究室、奈良大学 山中一郎氏、姫路市教育委員会 秋枝芳氏の御指導、御教示をたまわった。

---

### 発 挖 調 査 員 等 名 対

調査指導 関西大学教授・吹田市史編さん委員 網干善教

奈良大学助教授 山中一郎

調査担当者 藤原 学

調査員 山口卓也

調査補助員 服部聰志 水野昌光 白神典之 斎藤隆弘 藤田和尊 西岡誠志 額野耕平

立石堅志 徳田誠志 万谷幸美 増田真木 西本安秀 加藤淳次

## 目 次

第1章 発掘調査の契機と経過 .....	1
第2章 吉志部遺跡の発掘調査 .....	3
第3章 垂水南遺跡の調査 .....	23
第4章 垂水遺跡の調査 .....	32

## 挿 図 目 次

第1図 吉志部遺跡発掘調査風景 .....	1
第2図 発掘調査地点 .....	2
第3図 大阪周辺旧石器時代遺跡分布図 .....	5
第4図 吉志部遺跡周辺図 .....	6
第5図 吉志部遺跡地形実測図 .....	8
第6図 試掘場配置図 .....	9
第7図 吉志部遺跡土層断面図 .....	11
第8図 吉志部遺跡出土石器実測図 .....	13
第9図 吉志部遺跡採集ナイフ形石器実測図 .....	16
第10図 垂水遺跡採集石器実測図 .....	17
第11図 吉志部遺跡採集石核、剝片実測図 .....	18
第12図 吉志部遺跡採集石器実測図 .....	19
第13図 吉志部遺跡採集尖頭器実測図 .....	20
第14図 垂水南遺跡発掘調査区位置図 .....	23
第15図 土 層 断 面 図 .....	25
第16図 垂水南遺跡出土遺物実測図 .....	26
第17図 水田小畦群位置図 .....	28
第18図 垂水遺跡発掘調査地位置図 .....	33
第19図 垂水遺跡発掘調査区位置図 .....	34
第20図 垂水遺跡トレンチ土層断面図 .....	36

## 付 表 目 次

- 付表1 垂水南遺跡出土土器觀察表 ..... 26

## 図 版 目 次

- 図版第1 吉志部遺跡景観  
図版第2 吉志部遺跡近景・試掘場  
図版第3 吉志部遺跡試掘場 G 1  
図版第4 吉志部遺跡試掘場 G 2  
図版第5 吉志部遺跡試掘場 G 2・G 8  
図版第6 吉志部遺跡出土遺物  
図版第7 垂水南遺跡景観  
図版第8 垂水南遺跡近景・試掘場  
図版第9 垂水南遺跡河道路  
図版第10 垂水遺跡近景・試掘場

## 第1章 発掘調査の契機と経過

### 1. 昭和55年度の調査方針

吹田市教育委員会では、昭和51年度から国庫補助事業として、垂水南遺跡の緊急調査事業を開始し、54年度までの間に、12次の発掘調査を実施した。国庫補助事業以外でも、大規模開発にともない原因者負担による発掘調査が併せて進められ、昭和54年度末までの時点で合計16次にわたる発掘調査を実施して、遺跡範囲や遺物包蔵状況の確認に多くの成果があった。<sup>10)</sup>

昭和55年度は、市内各所における開発行為に広く対応するため、発掘調査対象遺跡を垂水南遺跡に限定することなく、市内の他の遺跡をも調査の対象とする計画がたてられた。

市内における調査予定地としては、垂水南遺跡以外に急速に宅地化の進行している藏人遺跡、垂水遺跡、吉志部遺跡などがあげられたが、このうち吉志部遺跡については、農閑期、特に12月以降に発掘調査を実施するということで、土地所有者との了解が成立したため、12月1日より測量調査及び試掘調査に着手した。

垂水南遺跡については、昭和53年度から継続されている旧豊津中学校内の試掘調査をつづけ、本遺跡の南端確認を進めることとなった。

今回調査地点は從来の調査地の最東南端にあたり、遺跡の南端及び東端の把握を試みた。特に本地点は、現在では天井川化している糸田川の右岸西方50mにあたるため、遺跡範囲の確認



第1図 吉志部遺跡発掘調査風景

にとどまらず、糸田川の河床上昇の経過と、古墳時代～中世期に至る遺構面との関連を追求し、複合平地遺跡である垂水南遺跡の形成過程を明らかにすることを調査目的の一つとした。したがって從来の調査は坪掘りを主体としたものであったが、今回の調査においては、長さ40m、幅2.5mの長大なトレンチを掘り、土層の堆積状況を連続的に把握することに努めた。

第3次調査は、垂水遺跡を対象とした。垂水遺跡については、昭和48年以来4カ年5次にわたり、吹田市と関西大学によって、発掘調査が実施されたが、これは垂水神社の境内地を対象としたものであった。<sup>6)</sup>

垂水遺跡は從来の報告によると、垂水神社を南限として円山町に至る約15万m<sup>2</sup>が遺跡範囲と想定されながら、円山町域においては、從来2カ所で小規模な坪掘りが行われたのみで、明確な成果は報告されていない。

戦前、戦後を通じて円山町から多くの遺物が収集されているにもかかわらず、円山町における遺跡の実態は概して不明であったわけである。このたび円山町370—3において住宅建設が計画されたが、この事業が個人の居住建設であることを考慮して、国庫補助事業の一環として、試掘調査を実施したものである。



1. 第1次調査地点(吉志部遺跡)

2. 第2次調査地点(垂水南遺跡)

3. 第3次調査地点(垂水遺跡)

第2図 発掘調査地点

## 第2章 吉志部遺跡の発掘調査

### 1. 調査に至るまでの経過

吉志部遺跡は、本市における最古の遺物を出土する遺跡である。地籍では吹田市岸部北1丁目302、303番地を中心とし、現在の大阪府立吹田高等学校の北側一帯の、標高20~30mの千里丘陵が沖積平野に向って南東に傾斜するゆるやかな斜面を立地とする。

地形の現状は周囲から迫る住宅化の波に押されて、わずかに水田11面及び用水池2面、畠地2面を残す3~4段の棚田となっている。

この地域から遺物の収集がはじめられた時期はかなり古く、土地の所有者である関本良太郎氏が水田耕作の作業中、石器の出土に気付き、遺物の収集を開始したのは昭和5年ごろであったという。以後遺物の収集は現在に至るまで、約半世紀にわたって続けられた。

この間に収集された膨大な資料が、初めて研究者の目に止ったのは、昭和43年2~3月で、この北東で行われていた吉志部瓦窯跡群の発掘調査に従事していた大阪府教育委員会の調査團に資料の一部が呈示されたことによる。この時、収集された多くの石器の中に、有茎尖頭器やナイフ形石器が混じっていることが明らかにされ、本遺跡は、府下でも有数の旧石器時代の遺跡として、一躍注目を浴びることとなった。

以後、昭和44年には、一部の資料が写真撮影されたのに始まり、徐々にではあるが、遺物の資料化への努力が開始されていった。昭和48年から市史編さん事業にともなって、吉志部遺跡採集資料の本格的な整理作業もされることとなり、そのうち旧石器時代の石器の一部については、秋枝芳氏によって公表された。<sup>10)</sup>この間、「高槻市史」(第6巻考古篇)に、本遺跡出土のナイフ形石器が収録され、あるいは大阪府立泉北資料館で一般公開されるなど、一部の実体は明らかにされつつあった。しかし、収集資料は膨大な量に達しており、そのすべてを網羅したものについては、近く刊行される『吹田市史』(第8巻別巻)を待たなければならない。しかし、市史編さん事業による整理の進捗状況は遂次報告されており、これについては昭和54年、高槻市立埋蔵文化財調査センターにおいて行われた「近畿研究者交流集会」における、秋枝芳氏による口頭発表がある。これをうけて松藤和人氏は本遺跡について論じ、高槻市塚原遺跡の遺物との類似点に注目したうえで、小型・極小型ナイフ形石器群は、国府型期とは異なる時期の所産であり、宮田山西地点B群、井島I型ナイフ形石器に対応するものと評価した。<sup>11)</sup>

このように研究者の評価が高まる中で、一方では本遺跡周辺における宅地化が着々と進み、旧来の地形を残存するのは今回の調査の対象となった関本氏の所有地のみという状況となつた。これまでの遺物収集のあり方からみて、遺物は水田耕作中の表面採集、あるいは用水池の泥上げの際の採集と考えられ、いずれにしても深層からの出土品でないことは明らかである。

このような状況で遺物が包含されていると考えられる以上、本地域周辺の木造建売住宅を主体とした開発行為によって、遺跡は大きな影響を被ると考えられ、遺跡保存の立場からも、早急な遺跡範囲の確認と、遺物包蔵状況の把握が必要となってきたのである。

なお、本遺跡に対する発掘調査としては、昭和50年11月に実施された吹田市小路290番地ほかにおいて行われた住宅建設工事にともなう発掘調査があり、中世・近世における当地の水田開発の一端を把握したほか、黄色粘土層（第4層）に密着した、弥生時代中期とみられる土器底部破片を検出した。これは今回の調査地点の150mの地点である。

後者については、関本氏が収集された遺物の中にある石庖丁の断片や、弥生時代の所産とみられる石鎌に対応するものとみられる。しかしその下層は砂層を主体とした不安定な様相を呈し、遺物等の検出もなく、したがって、旧石器・縄文両時代については、何ら所見を得ることはできなかった。遺跡範囲の確定については、今後の周辺地域の調査に期待されよう。

## 2. 位置と環境

吹田市は、大阪府の中心より若干北に位置する。地形的には、市の中部と北部一帯は、前期洪積層の隆起によって形成された複雑な丘陵地帯であり、東部と南部一帯は、淀川と安威川が上流から運んできた土砂の堆積によって形成された低位の沖積平野である。

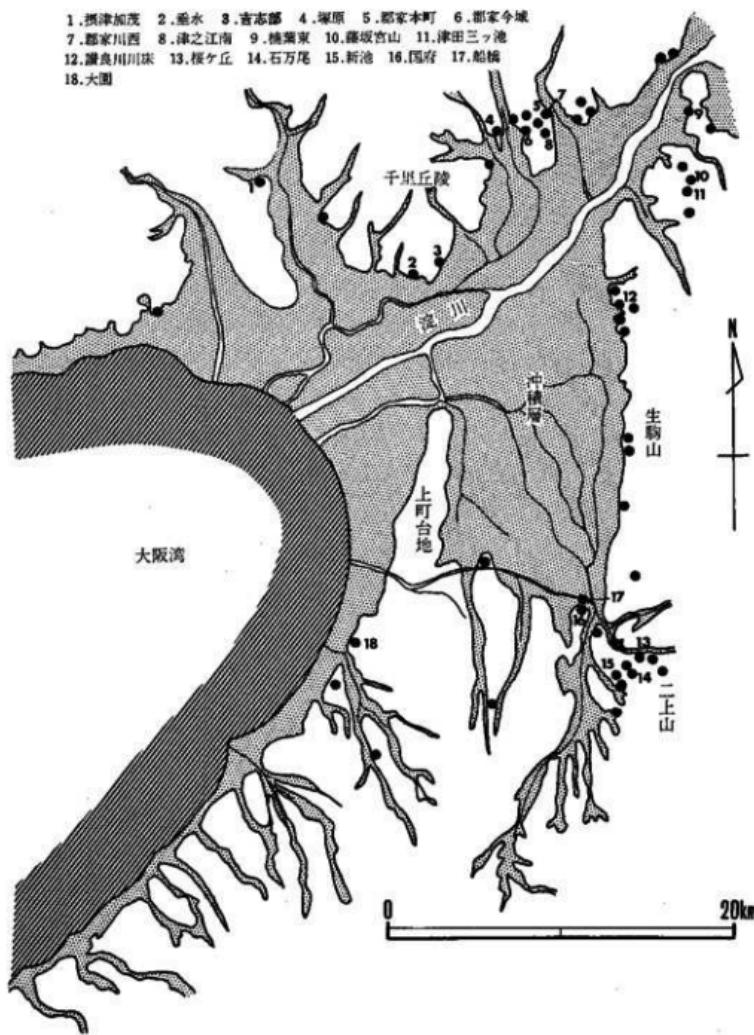
市の北半を占める丘陵は千里丘陵と呼ばれ、淀川以南の枚方丘陵、泉北丘陵などとともに、大阪湾岸に広く分布する大阪層群の隆起したものひとつである。千里丘陵は8km四方で、その中に吹田市の北半、豊中市の東半、箕面市、茨木市的一部を包括している。丘陵の隆起運動が、西からの突上げによって行われたため、概して西方が高く、東方が低くなっている。最高地点は豊中市の島熊山北方にあり、標高133.8mである。吹田市域では、80～50m前後のなだらかに起伏する丘陵になっている。

市の南半を占める沖積平野は、大阪平野の一部であり、この大阪平野は、千里丘陵と上町台地を結ぶ線を境として、東側の河内平野と北摂平野、南側の和泉平野、西北側の西摂平野に分けられる。この沖積層は難波累層とよばれ、洪積世の最末期から沖積世にかけて堆積した地層である。

ウルム氷期の最盛期には、海平面が現在よりも約150mも低く、瀬戸内は、湖の点在する大きな谷地形となっており、吹田市の南部沖積平野では、地下20m付近に、このころの旧地形を認めることができる。海面はその後徐々に上昇し、河内平野にも海水が浸入するようになる。以後、大阪平野は河内湾Ⅰの時代、Ⅱの時代、大阪湾Ⅰの時代、Ⅱの時代と次第に陸化していく。特に、この陸化では、千里丘陵と上町台地による砂堆が沿岸洲を形成し、これにより河内湖の沖積作用が進行をやめたともいえる。

さて、吉志部遺跡は、以上のような自然環境のもとで、千里丘陵の東南端に形成されたのである。遺跡は大阪府立吹田高校西北に緩やかに傾斜する標高20～30mの地点にあり、遺物は吹田市岸部北1丁目302番地を中心として、東西約100m、南北約50mの範囲に分布している。

1. 摂津加茂 2. 垂水 3. 吉志部 4. 塚原 5. 郡家本町 6. 郡家今城  
 7. 郡家川西 8. 津之江南 9. 桃葉東 10. 藤坂宮山 11. 津田三ヶ池  
 12. 鰐魚川川床 13. 櫻ヶ丘 14. 石万尾 15. 新池 16. 馬鹿 17. 船橋  
 18. 大園



第3図 大阪周辺旧石器時代遺跡分布図

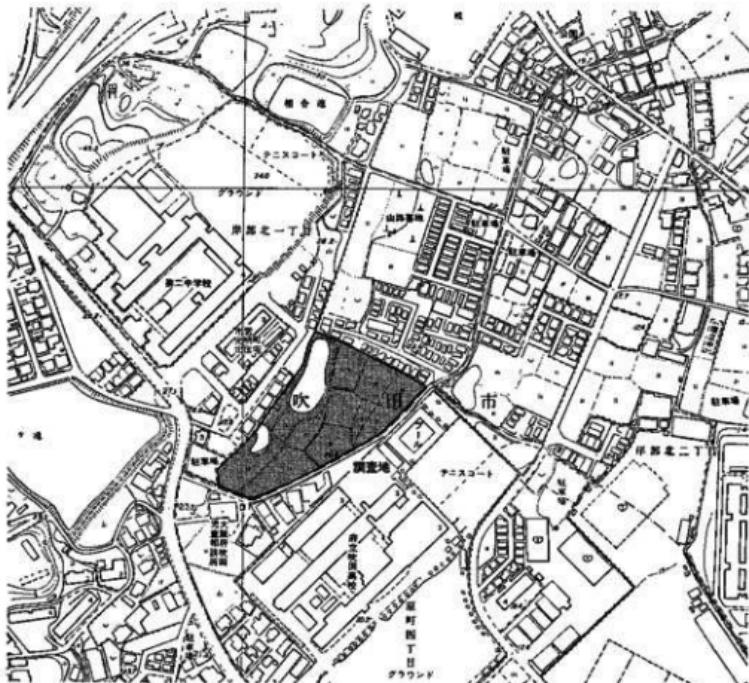
今日では遺跡の周辺が、ほとんど宅地化されたため、旧地形の景観は見られない。

今までの収集活動で、この遺跡からは、國府型期以降の小型化したナイフ形石器、錐状石器、楔形石器、振器、削器、剝片、石核などの旧石器と、縄文時代草創期の有舌尖頭器、縄文時代の石鎌、石錐等約300点の石器が発見されている。<sup>(1)</sup>

本遺跡の考古学的環境は、その該当の時期が吹田市内では明らかでなく、わずかに垂水遺跡から出土した旧石器をみるとおり、縄文時代の遺跡は、本遺跡を除けば未発見である。垂水遺跡からは、小型のナイフ形石器、楔形石器、彫器、剝片、石核などが発見されており、約2.5kmを隔てて千里丘陵の南端に位置するこの遺跡は、きわめて重要な存在である。<sup>(2)</sup>

吹田市をめぐる各地には、高槻市周辺に旧石器時代遺跡が多数分布している。國府型期の遺跡として郡家今城遺跡<sup>(3)</sup>、津之江南遺跡<sup>(4)</sup>などがあり、それらに後続するものと考えられる遺跡に、小型ナイフ形石器を出土する高槻市塚原遺跡<sup>(5)</sup>、枚方市藤坂宮山遺跡<sup>(6)</sup>などがある。

有舌尖頭器は、単独で発見される場合が多く高槻市の弁天山遺跡A地点、皇子塚遺跡、枚方



第4図 吉志部遺跡周辺図(1:5000)

市の樟葉南遺跡などで発見されている。

縄文時代の遺跡は、吹田市内では他に発見されておらず、枚方市鶴谷遺跡などの早期遺跡、藤井寺市国府遺跡、富田林錦織遺跡などの前期遺跡は、丘陵の端部を立地とするが、中期以降になると扇状地や砂堆を中心に分布するようになり、大阪市森の宮遺跡、豊中市勝部遺跡、守口市八雲遺跡、茨木市東奈良遺跡などがある。

弥生時代以降になると、吹田市内でも、急激に遺跡が増加し、垂水遺跡、藏人遺跡、五反鳥遺跡、都呂須遺跡が形成される。

吹田市周辺においては、旧石器の遺跡は、丘陵端部を中心にして発見されているが、かならずしも低地に形成されたものがないと考えるべきでもなく、むしろ厚い沖積層に埋まっていると見られる。旧石器時代および、縄文時代早・中期の遺跡が、沖積地で発見されにくい理由のひとつとして、沖積土層の厚さをあげることにしたる異論はない。

吉志部遺跡と垂水遺跡は、千里丘陵の端部に営まれ、上町台地とともに大阪平野を二分する地点で、しかも腰望のよい所に立地する。すなわちこの両遺跡は背後に深い谷をもつ丘陵を擁し、前面に低湿地をのぞんで、水陸の幸に恵まれていたことであろう。これは遺跡立地の大きな要因と考えられよう。しかも、はるかにサヌカイトの原石を供給する二上山をのぞみうる地であることも見落されてはなるまい。

### 3. 調査の経過

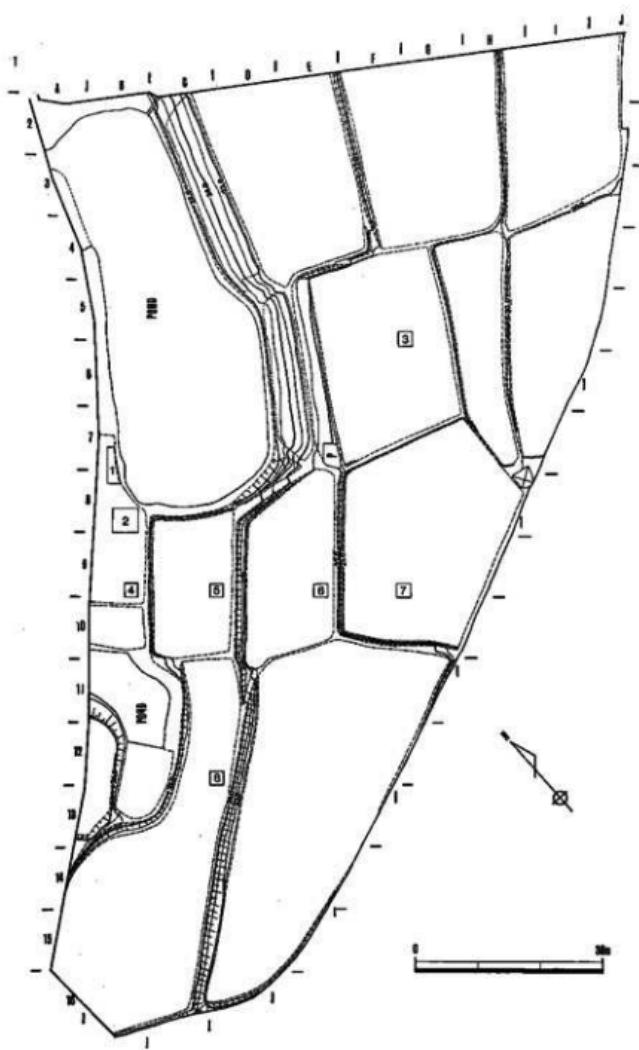
本遺跡の調査は、12月1日から開始され、12月27日終了した。12月1日に開始した地形測量においては、急速に進展する遺跡周辺の開発により、縮小されつつある遺跡の調査可能区域の地形を確認し、発掘調査の成果と併せて、水田開発以前の地形を、ほぼ復元することができた。

発掘調査については、特に次の点を主要目標とした。

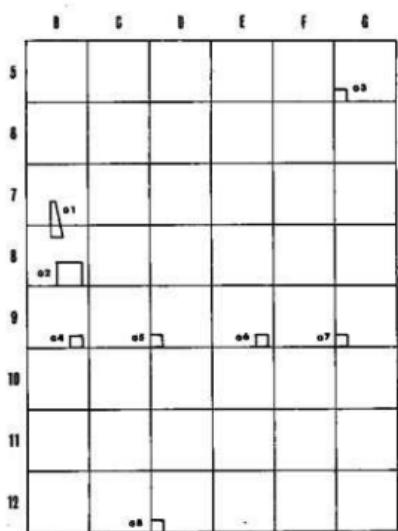
1. 吉志部遺跡の構造、遺物の包蔵状況を確認すること。
2. 旧石器時代及び縄文時代の文化層を、層位的に把握すること。
3. 遺物の原位置を確認し、記録できる良好な包蔵地点を検出すること。

本調査は、吹田市における旧石器・縄文時代の遺跡調査の、本格的調査として最初のものであり、その成果は今後の調査の計画をたてるうえで重要なものとなった。

大阪府下においては、すでに高槻市において旧石器時代の遺跡が発掘調査され、多数の遺物が原位置を保つ良好な状態で検出され、大きな成果をあげている。本遺跡の調査においても、このような状況をふまえ、近畿地方西部及び瀬戸内地方において、良好な遺跡の追加を目指し、従来、表面採集の遺物を主な資料として作成された旧石器時代の石器編年を強化し得る資料の検出をも目的とした。



第5図 吉志部遺跡地形実測図(1:900)



第6図 試掘場配置図

発掘調査にあたっては、遺跡全域に  $10m \times 10m$  のグリッドを設定した。本遺跡は既に水田として開発されており、等高線が平行して走るという状況から、本来の旧地形を最もよく反映し、土層の断面、遺構・遺物の投影が有効になるよう配慮して、特に磁北方向に添うグリッド設定をせず、現在の等高線に平行する方向に設定した。

設定したグリッドは、遺跡の短方向を西から A～J と呼称し、長方向を北から 1～16 と呼称した。また今後の調査に備えて、主要軸列にはプラスチック製の杭を使用した。

今次の調査は、最初の調査でもあり、坪掘りを主体として行い、試掘場を第6図のとおり 8 カ所に設定した。

まず遺跡の北端に位置する池の南部

から多数の遺物が採集されていることを考慮し、池の西南にあたる 7B スクウェアと、8B スクウェアに、試掘場 G1・G2 を設定した。池の東に G3、池の南の 9B スクウェアに G4、9D スクウェアに G5、9E スクウェアに G6、9G スクウェアに G7 を、南に離れて、12D スクウェアに G8 を設定したうえで、本遺跡の土層堆積状況の把握と、包含層の有無を調査し、土層断面図の作成、写真撮影を実施し、12月27日試掘場を埋めもどして調査を終了した。

#### 4. 調査の成果

##### a. 調査結果

遺跡地内に 8 カ所の試掘場を設置して、G1～G8 とし、各試掘場において層序発掘を行い、遺構・遺物の検出につとめた。

基本的な層序は、各区ともほぼ同様であり、特に各区の第7層から、若干の須恵器片、土師器片が検出された。旧石器・縄文時代の包含層は検出、確認されなかったが、G1 の第7層から、第8層の黄色粘土が強く付着したサヌカイト剝片 1 点を、原位置から遊離した状態で検出した。（第8図1）

次に、各試掘場ごとの調査所見を概観する。

G1 は、長さ 6m、長幅 2m、短幅 1m の台形状を呈する試掘場である。第6層以上の土層

は、数次にわたる水田改良により積層された土層であり、第7層以下の土層が本来の自然堆積土であると判断された。第7層からは須恵器、土師器の小破片とともに、サスカイトの剝片が検出されたが、この剝片には第8層を形成する黄色粘土が強く付着しており、第8層から浮上した可能性が考えられたので、厚さ約10cmの第8層を精査したが、遺物を検出するに至らなかった。この第8層は、池の周辺では削られて失われている。池の内側で発見された遺物は第8層が自然流失した際遊離して、池中に転落したものと考えられる。すくなくともG1においては、旧石器の包含層は、第8層の黄色粘土層であったと推定される。

G2は、4m×4mの方形の試掘場である。土層は、G1とはほぼ同様であり、第7層からは須恵器、土師器の小破片を検出した。第8層は部分的にしか残存しておらず、石器類は検出されなかつたが、G1・G2周辺には第8層の黄色粘土層が遺存しており、この層が遺物包含層であることが確認された。

G3は、2m×2mの方形の試掘場である。土層は、G1、G2とはほぼ同様であり、第12層は第7層に類似するが、遺物は認められず、また第8層の存在も認められなかつた。

G4は、2m×2mの方形の試掘場である。この試掘場では、第2～5層が認められず、第9層の地山である明灰色粘質土層が、同一面にあるG1・G2よりも高いレベルに位置することを注意すべきである。遺物は検出されず、第8層の黄色粘土層も認められない。整地前の尾根の一部に当たるところであろうか。

G5は、2m×2mの方形の試掘場である。第7層と第8層が認められず、遺物も検出されない。

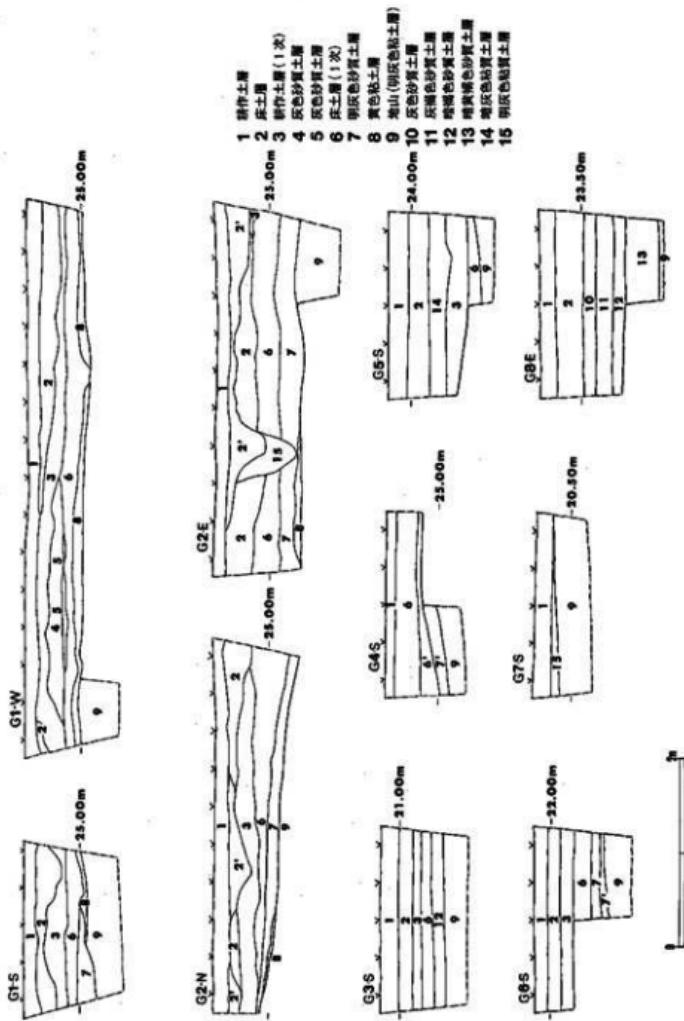
G6は、2m×2mの方形の試掘場である。ほぼ標準的な層序を示すが、G3～5と同様に第8層の黄色粘土層を欠き、遺物は検出されない。

G7は、2m×2mの方形の試掘場である。土層は、表土直下で明灰色粘土層の地山に達し、盛土、堆積土等は認められず、従って第7～8層は存在せず、著しい削平をうけており遺物は検出されなかつた。

G8は、2m×2mの方形の試掘場である。土層は、他の試掘場と異なる対応関係を認ることはできないが、地山より上位の土層については、その土層を観察した結果、水田造成時の盛土であろうと推定され、地山の直上には古い土層は認められず、第7・8層相当の土層も存在しない。わずかに土師質土器の細片を検出したのみである。

本遺跡は、水田造成時全域にわたって削平と盛土が行われており、それにともなう削平は、ほとんど全域にわたり、本来の土層である第7・8層は部分的にしか残存せず、特に第8層である黄色粘土層は、7B・8Bスクエア周辺にしか残存しないものと考えられる。

本遺跡では、以前から北端の池の南部周辺から石器がある程度集中して発見されたと報告されており、周辺の黄色粘土層から遊離して流入したものであろうと考えられる。



第7図 吉志部試跡土層断面図

本年度の発掘調査においては、当初に期待した3目標のうち、遺跡の遺構・遺物の包蔵状況については、G1から剝片を検出したことにより、一部を窺わせられるものの、文化層の層位的な把握、および、原位置における遺物の検出をすることはできなかった。これは遺跡の西北側丘陵が、すでに開発行為によって宅地化されており、遺跡の主要部が破壊された結果とも考えられる。

しかし、従来の収集遺物の質量と、今回の調査結果をあわせ考へれば、今後の調査継続が必要であることは明らかである。

#### b. 出土遺物

本調査では、若干の須恵器、土師質土器の小破片などを検出してはいるが、ここではG1の第7層から検出したサヌカイト剝片1点と、昭和53年9月に、遺跡の北端にある池の南半部から収集した石器遺物5点について説明する。（第8図）

1は、既に述べたようにG1の第7層に浮上した状態で検出されたものである。表面は自然面に覆われていて、この自然面の凹部に第8層の黄色粘土が強く付着しており、この剝片が第8層から離れた可能性を強く示している。残存している打面は平坦であり、打面調整および頭部調整は施されていない。剝片は形状が寸詰りがあり、断面形も厚い弧状を呈し、また表面が全面自然面で覆われていることから、目的剝片ではなく、一種の調整剝片であろうと考えられる。打撃はハードハンマーによるものである。

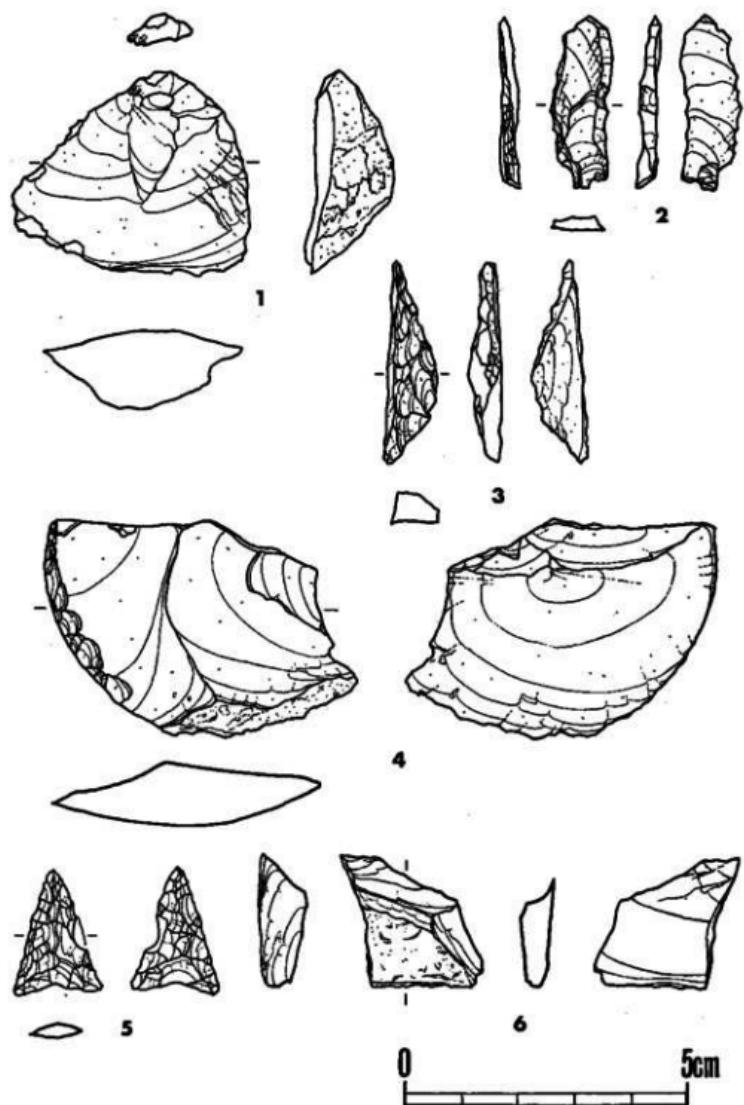
2は、昭和53年9月に、池の東岸が若干張り出す部分の池岸直下で収集したナイフ形石器である。小型の縦長剝片を素材とし、左縁下半部に刃溝し加工を施している。素材は著しく小型であり、平行する2本の縁を持っていることから、小石刀と考えられる。打面および打瘤は除去されていない。

3は、2と同時に池の南西、G1直下の池岸で収集した横長剝片である。表面には著しい頭部調整痕が認められる。裏面上半には打面を残しておらず、打面は平坦で打面調整は施されていない。頭部調整の結果、一見ナイフ形石器に類似した形状を呈し、また著しい風化のため灰白色を呈する。

4は、池の南東岸、2が収集された付近で収集した削器である。大きな2つの削離による打面調整が施された不定形な剝片を素材としている。左縁に片面から加工を施し、削器としている。先端部には自然面が残存する。

5は、3と同様にG1直下の池岸で収集した石鎌である。風化程度は他のものに比べて若干少ない。わずかに基部を凹形にした、三角形の凹基無茎式石鎌である。全体の作りは精巧である。

6は、G1より若干北の池岸から収集した横長を呈する剝片である。中央から折断されてお



第 8 図 吉志部遺跡出土石器実測図

り、打面・打瘤とも認められない。表面に大きな自然面を残している。

以上述べた計6点の石器遺物は、從来本遺跡において採集された資料と比較して基本的に差異は認められず、同様の資料として理解し、位置づけ得るものである。

5の石鏃を除き、他は一応旧石器時代の遺物として把握しておきたい。

## 5. ま と め

吉志部遺跡における今回の調査は、当初設定したとおり、

1. 遺跡の構造・遺物の包蔵状況を確認すること
2. 文化層を層位的に把握すること
3. 遺物の原位置を確認し、記録できる良好な包蔵地点を検出すること

を目標として実施したが、G1から浮上した状態であったといえ、サヌカイト剣片1点を検出し得たことにより、第1項の目標は一部を達成したといえよう。第2項、第3項の目標については、今回の調査が試掘であり、充分な調査が行えず、今後の課題となった。旧石器の包含層と考えられる黄色粘土層は、G1・G2において認められ、主としてこの周辺に残存していると考えられるから、今後、この周辺の精査に期待がかけられる。

今回の調査で検出された遺物は、剣片1点のみであったが、これに昭和53年9月に収集されたナイフ形石器・横長剣片・削器等5点を加えても、吉志部遺跡の旧石器・縄文時代の文化を把握するには十分でない、ここでは、その不足を補うため、昭和5年以来、土地所有者である関本良太郎氏が収集をつづけてきた約300点の資料を合せて、吉志部遺跡の位置づけを、特に旧石器について行ない、本遺跡をめぐる問題点の二、三を指摘し、本年度調査のまとめとしたい。

吉志部遺跡から検出された資料は、昭和5年以来のものを総括して、一応時代判別のできたものは、計128点である。旧石器と縄文時代の石器の区分は、ナイフ形石器等の特徴的な石器を除き、その風化程度と種別とにより一応の判断を下した。器種分類の結果、旧石器と判断されたものは、一様に風化程度が他のものに比較して強く、一応この区分方法が本遺跡では信頼できると考えられる。旧石器と判断されたものは、計50点であり、縄文時代の石器と判断されたものは、石鏃を主とする78点であった。旧石器と判断された石器群には、ナイフ形石器を主体としたものと、尖頭器を主体としたものとふたつがある。

ナイフ形石器は計17点採集されており、有舌尖頭器等尖頭器類は計8点である。その他には錐状石器・楔形石器・削器・横長剣片・縦長剣片・石核・小型剣片がある。錐状石器がメノウ製であり、縦長剣片にチャート製が混じている他はサヌカイト製である。

## ナイフ形石器について

ナイフ形石器には、大型の切出し形のもの 1 点（第 9 図 1）。横長剝片を素材とした中型のもので打面を取り除く急角度の背済し加工をしたもの 3 点（第 9 図 3・12・13）。横長剝片を素材とした中型のもので打面を取り除くのみならず、刃部側縁辺の一部に刃済し加工を施したもの 2 点（第 9 図 2・5）。縦長剝片を素材とした中型のもので、基部周辺の両側縁に部分的な加工を施したもの 2 点（第 8 図 2・第 9 図 7）。欠損が著しく全体を観察できないもの 1 点（第 9 図 14）。横長剝片を素材とした小型のもので打面を取り除く急角度の背済し加工を施したもの 3 点（第 9 図 4・11・15）。横長剝片を素材とした打面刃部側縁辺の一部にも刃済し加工を施した小型のもの 3 点（第 9 図 6・9・10）。縦長剝片を素材とした小型のもの 1 点（第 9 図 8）がある。

ナイフ形石器には大・中・小の三群が基本的に存在するが、それぞれはその形態の違いにより細分されることになる。この大・中・小の三群は、かならずしも同一時期のものとは断定できない。特に 2 は剝片素材の横長剝片石核から最初に剥離された翼状剝片様の横長剝片を素材としており、他とは時期を異にする可能性が高い。また 1 の大きさや形状が吉志部遺跡の中では異質である点は注目されよう。しかし、すくなくとも 2 を除いたナイフ形石器は、その大きさの若干の差異を越えて一派として共伴するものと考えている。中・小の二群に関しては後に述べるが、その素材の形状および素材剝片剥離技術、加工部位等の点ではほぼ同様である点でも、前述した推測は成立つ。

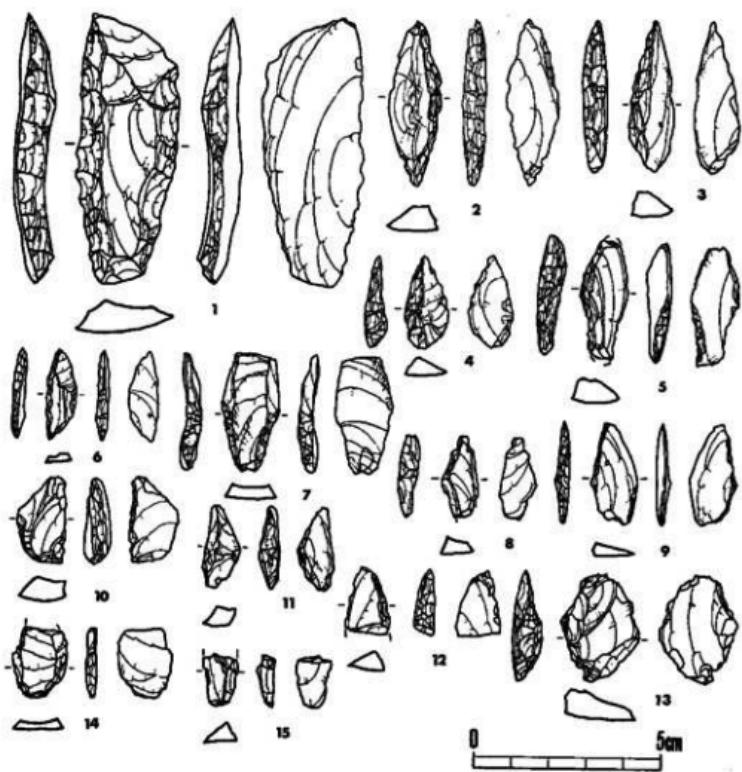
瀬戸内地方の編年については、昭和 40 年に鎌木義昌氏によって、国府型→宮田山型→井島 I 型として提唱され、また近畿地方西部の編年については、松藤と人氏によって、国府期（古・新）→津之江南 C 期→藤坂宮山期→太鳥期として把握されるところとなった。

ところで、吉志部遺跡のナイフ形石器群は編年的にどう位置づけられるであろうか。

吉志部遺跡のナイフ形石器には、2 を除き翼状剝片を素材として製作された可能性があるものではなく、瀬戸内技法の存在は認められない。また出土した剝片、石核類にも瀬戸内技法の存在する可能性は認められないので、吉志部遺跡のナイフ形石器群は、国府型期より後出のものと考えられる。大型の 1 は切出し形を呈しており、これに類するナイフ形石器は国府型と定義されない。形状に関しては津之江南遺跡 C 地点の一部の例に類似品のある点は注目される。国府型期のナイフ形石器の整形は打面を取り除く急角度の背済し加工が一般的であり、津之江南遺跡 C 地点例及び吉志部遺跡例は、背済し、刃済し加工が鋸齒状を呈するなど国府型的な様相を残存させるものの、国府型期より後のものと考えたほうが妥当であろう。

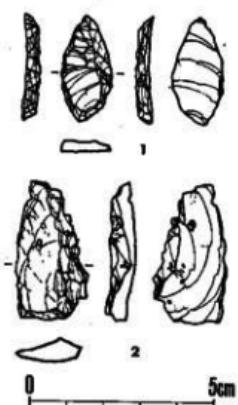
近畿地方西部において、国府型期直後に想定されているのは、津之江南遺跡 C 地点の資料であるが、そのナイフ形石器は、比較的大型であり、大型切出形ナイフ形石器を除けば、中・小型を主体とした吉志部遺跡のナイフ形石器群とは異なるものと考えられる。

吉志部遺跡のナイフ形石器群に類似するものを周辺地域に求めるならば、高槻市塚原遺跡、



第9図 吉志部遺跡採集ナイフ形石器実測図

吹田市垂水遺跡、やや離れて、神戸市金棒池遺跡、姫路市御着城址遺跡等が挙げられる。高槻市塚原遺跡では、ナイフ形石器、石斧、円形搔器、削器、剝片、石核などが採集されている。塚原遺跡のナイフ形石器群と、吉志部遺跡のナイフ形石器群を比較するならば、ナイフ形石器が中・小型に限定される点、ナイフ形石器の素材には横長剝片、縦長剝片の双方を利用する点等同様である。器形整形では、吉志部遺跡では打面側縁辺と刃部側縁辺の二側縁調整加工を施すものが多いが、切出し形を呈するのは2例(1・6)のみであり、塚原遺跡のような中型の切出形ナイフ形石器は存在しないなどの差異が認められるが、器形整形および剝片剝離技法には共通性が多く、吉志部遺跡と塚原遺跡とは、ほぼ同時期のものと考えられよう。吹田市垂水遺跡からは、塚原遺跡の小型切出形ナイフ形石器に類似したもの(第10図1)が検出されてお



第10図 垂水遺跡採集石器実測図  
せぜに同一時期のものとして考えるほうが妥当であろう。したがって吉志部、塚原、垂水の三遺跡は同時期の遺跡である可能性が考えられることとなる。

り、千里丘陵では吉志部遺跡を除けば唯一の遺跡として注目され、時間的・位置的関係は、今後の問題となろう。

吉志部遺跡及び塚原遺跡のナイフ形石器群には、中型のものと小型のものが共存しており、それぞれのナイフ形石器の調整の施される部位も同様である。また垂水遺跡では小型切出形ナイフ形石器が一点のみであるが、横長剣片は中型ナイフ形石器と対応している。

郡家本町遺跡では、中型ナイフ形石器が主体となって採集されており、小型のものは共伴していない。郡家本町遺跡のように中型ナイフ形石器を主体とした遺跡が今後増加し、また小型ナイフ形石器が単純に存在している遺跡も発見されるなら、中型と小型は分離されるべきかもしれない。しかし現在の吉志部遺跡及び塚原遺跡等周辺遺跡の状況では、一応中型ナイフ形石器と小型ナイフ形石器は区分せずに同一時期のものとして考えるほうが妥当であろう。したがって吉志部、塚原、垂水の三遺跡は同時期の遺跡である可能性が考えられることとなる。

塚原遺跡のナイフ形石器群を井島I型と対応しようとする考え方や、国府型に後続させる考え方がある。井島I型は、その大きさは吉志部遺跡及び塚原遺跡の小型ナイフ形石器に対応するが、井島I型は小型切出形が主体である。他方言吉志部遺跡、塚原遺跡では、二側縁に調整を施すものが多く、小型切出形のものは少ない。また中型のナイフ形石器の位置づけは明らかではない。井島I型が太島遺跡のように小型ナイフ形石器が単独で検出されていないかぎり、現状での対応には慎重でありたい。塚原遺跡を国府型期直後に位置づける考えは、津之江南遺跡C地点を国府型期に含めて考え、翼状剣片、および翼状剣片石核等瀬戸内技法が発掘資料に認められないのを発掘調査範囲の狭さによる石器組成の不充分な検出のためとしている。しかし、津之江南遺跡C地点の資料は、ナイフ形石器には翼状剣片を素材としたものは認められず、翼状剣片、同石核等も存在していない。またナイフ形石器の整形バリエーションは豊富であり、その素材も縦長剣片、横長剣片の双方を利用するなど国府型期のものとするには難しい点があると考えられよう。この結果、国府型と吉志部、塚原遺跡との間に津之江南遺跡C地点の資料を位置付ける考えは妥当であろう。

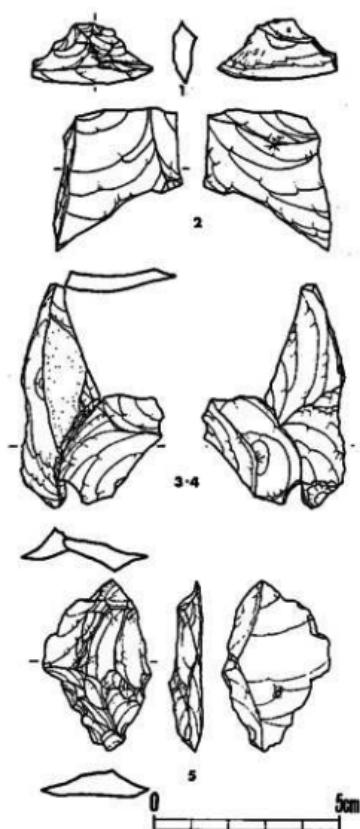
吉志部遺跡及び塚原遺跡のナイフ形石器群は、過渡的な津之江南遺跡C地点に代表される石器群よりも後のものと考えられ、また一部に井島I型的な石器を含むが、かならずしもナイフ形石器の最終末的な様相を呈しているとは看取できない。

ところで、瀬戸内地方中央部の資料を中心として編年された国府型→宮田山型→井島I型という変遷は、最近その方法論が批判されており近畿地方西部の編年とは単純に照合するわけに

はいかないようである。特に中、小型ナイフ形石器が主体となる時期には、近畿地方中央部と瀬戸内地方中央部とでは、地域差を生じている可能性が高く、今後検討すべき問題点が多い。

#### 剥片剝離技術について

吉志部遺跡からは、剥片剝離技術を窺える資料が若干採集されている。それは同一個体と考えられる接合資料を含む7点（第11図1～4）であり、このうち剥片1点と石核が接合している。石核4は自然面からの打撃により下半部を欠いているが、本来は縦長の剥片を目的としたものである。2のような形状の剥片を連続して剝離したと考えられ、3の剥片は剝離が延びき



第11図 吉志部遺跡採集石核・剥片実測図

らず、螺旋状剝離となっている。剝離に際しては打面調整および頭部調整は施されず、打面上を若干左右しながら数点の目的剥片を剝離し、打面を変更して作業を継続している。1の剥片は打面線に頭部調整を施した横長剥片であり、その大きさにより、2の剥片等と同じ形状の剥片を石核とし、この石核を割り取るよう剝離されたものと考えられ、4の縦長剥片石核から直接剝離したものとは考えにくい。

吉志部遺跡の資料に類似したものとしては、高槻市津之江南遺跡C地点の接合資料等がある。津之江南遺跡C地点の接合資料には、縦長剥片を素材としたナイフ形石器が含まれ、その他接合資料も不定形で寸詰まりな縦長剥片であり、石核から打面調整および打面線の頭部調整を施さず剝離するなど、吉志部遺跡の同一個体資料から看取される剥片剝離技術にきわめて類似している。なお津之江南遺跡C地点の接合資料を、櫛石島の採集資料から考えられている剝離作業面と打面とが交互に入れ替る剥片を素材とした横長剥片石核による剝片剝離技術と同一、ないし関連を認めようとする考えがあるが、目的とする剥片の形状、石核の調整法等相異点が多く慎重に考えるべきであろう。

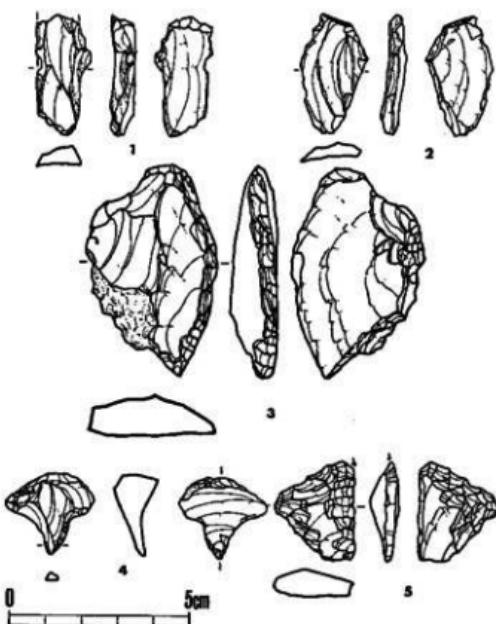
1の横長剣片の表面には、石核の剝離作業面上で打面線の頭部調整が施されている。また打面には平坦面を利用している。第8図3の横長剣片も同種の剣片であり、このような剣片は、垂水遺跡（第10図2）、琴原遺跡、津之江南遺跡C地点、神戸市金棒池遺跡等で広く存在している。この剣片の剝離は、剝離作業面と打面とが交互に入れ替るのでなく、打面はつねに一定であると考えられ、頭部調整が著しく施されていることから、石核は一見角錐状石器にちかい形状を呈するものと想定されようか。津之江南遺跡C地点の資料には、その類の石核と横長剣片が存在している。ところで、この頭部調整の施された横長剣片を素材としたナイフ形石器も広く存在するようであり、その一部には平坦打面を残存させているナイフ形石器も散見される。特に吉志部遺跡と塚原遺跡に、部分的に素材の平坦な打面を残すナイフ形石器が多く存在する点は注目されよう。

吉志部遺跡では、さきのような剣片剥離技術が存在し、これは櫛石島技法とは異なる。瀬戸内中央部での中、小型ナイフ形石器の時期の剣片剥離技術が櫛石島技法により代表され、ナイフ形石器の整形にも明瞭な差異が認められるならば、その地域差の存在を認めなければならない。しかし、近畿地方中央部においても第11図5のように櫛石島技法の所産と考えられる石核も存在するなど、剣片剥離技術が複合して存在する可能性も考慮する必要があろう。

#### 石器組成について

吉志部遺跡からは、ナイフ形石器のはか楔形石器（第12図5）、錐状石器（4）、削器（第8図4）撫器（3）等の石器が採集されている。かならずしも、すべてがナイフ形石器に伴うとするのは困難であるが、尖頭器に他の器種が共伴するのは近畿地方では稀であり、一応ナイフ形石器の石器組成の一部であると考えておく。

吉志部遺跡の石器組成は、一応完結したセット関係をなすと考えられる。塚原遺跡では、円形撫器、削器、彫器等



第12図 吉志部遺跡採集石器実測図

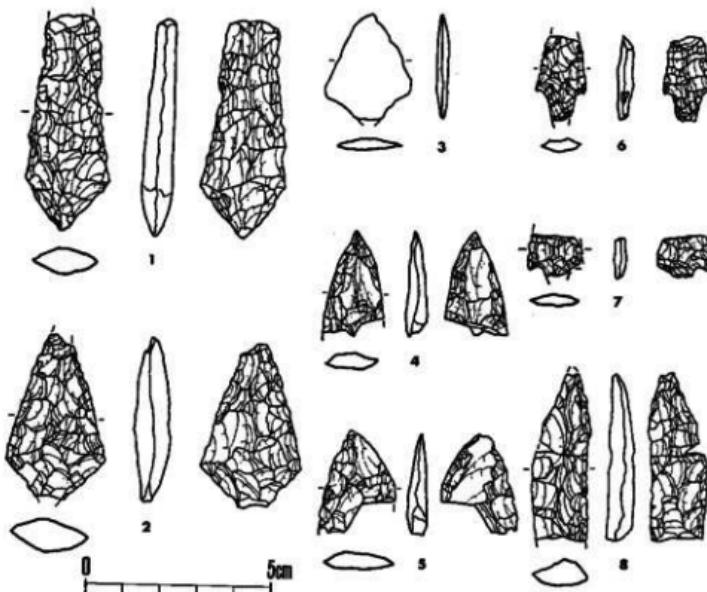
が豊富に存在しており、ナイフ形石器等の類似とともに興味ぶかい。

吉志部遺跡の櫛器（3）は塚原遺跡の円形櫛器に対応するものであろうか。中型のナイフ形石器を主体とする姫路市御着城址遺跡では、小型の角錐状石器、削器、先刃形櫛器、彫器が採集されており、石器組成に角錐状石器の加わる可能性がある。

ところで、このように近畿地方中央部では、中、小型ナイフ形石器の石器組成は豊富であるが、瀬戸内地方中央部では、さきの国府型期に引き続き石器組成は単純であり、ナイフ形石器にわずかの削器がともなうにすぎない。剥片剝離法のほかに、石器組成においても瀬戸内地方中央部と近畿地方中央部とでは地域差が存在している可能性が考えられる。その地域性の問題とともに、近畿地方中央部において石器組成が豊富化する要因の追求も今後重要な課題となる。

#### 尖頭器類について

吉志部遺跡からは計8点の尖頭器が採集されている（第13図1～8）。有舌尖頭器5点、尖頭器破片等3点である。有舌尖頭器は3種に区分することができ、I類身部の両側縁が直線的で舌部が三角形状を呈するように基部両側縁が直線的に張りだすもので、長いもの1点（1）、幅が若干広いもの1点（2）、II類身部の両側縁が弧状に張りだし、舌部が内擣する二側縁で



第13図 吉志部遺跡採集尖頭器実測図

作りだされるもの 1 点（3）、■類小型で身部の両側縁が直線的で若干鋸歯状を呈し、舌部が長く逆刺が身部に抉りこむような状態で作りだされているもの 2 点（6・7）に細分される。

尖頭器破片等 3 点は、有舌尖頭器の基部を欠いた可能性のあるもの（4）、側縁が弧状を呈すもの（8）などである。

近畿地方では、尖頭器は通常単独で採集される場合が多く、一遺跡で 8 点も採集された例は稀である。吉志部遺跡の有舌尖頭器、尖頭器類は形態のバリエーションが豊富であり、單一時期の所産とは考えられない。しかし、採集個数の多さは、採集者関本良太郎氏が、この遺跡にアタックした息の長さを語るものともいえ、貴重な資料群をなすことは否めまい。

I 類は、その形状により福井県鳴鹿遺跡、長野県柳又遺跡の一部の有舌尖頭器に類似しており、近畿地方周辺でも採集されているものに類似したものが散見される。II 類は、やや不定形であるが、愛媛県上黒岩遺跡、柳又遺跡のものうち短形のものに類似するようである。III 類は、新潟県小瀬ヶ沢遺跡の一部の有舌尖頭器に類似する。これに類するものが山形県津谷遺跡で採集されているほかは、ほとんど見当らない。ただ逆刺が明瞭でないものは、日本海沿岸を中心として山陰地方から東北地方にまで分布している。逆刺の明確なものでは吉志部遺跡は西限として位置づけられ、注目すべき資料であろう。

吉志部遺跡採集の尖頭器は、單一時期のものとは思われないが、これらの有舌尖頭器には土器がともなう可能性が高い。長野県柳又遺跡、愛媛県上黒岩遺跡等では、細腰起線文土器が出土しており、新潟県小瀬ヶ沢遺跡でも、この種の土器をともなう可能性が高い。吉志部遺跡でこの時期の土器が採集される可能性があり、注意が必要である。

#### 旧石器時代の遺跡立地について

吉志部遺跡は、さきに位置と環境の項で述べたように千里丘陵の東南端にちかく位置する。大阪平野は千里丘陵と上町台地により二分され、両者の間を淀川が流れている。旧石器時代、吉志部遺跡が形成された当時は大阪平野を形成する沖積作用は開始されておらず、海面も非常に低く、吉志部遺跡は大きな開拓谷のくびれ部を見おろす段丘上に立地していたことになる。大阪周辺では旧石器時代の遺跡のほとんどが、沖積地に隣接する洪積台地の縁辺に立地しており、それらの遺跡はほぼ同一高度である。第 3 図により、この遺跡が、沖積作用を開始する直前の大阪盆地である河内平野を見おろす地点にあったことが理解されよう。

国府型期の遺跡は、二上山周辺と高槻市周辺に集中するが、これはそれぞれ河内平野の北端と南端にあたり、旧石器時代の地形と考え合せれば興味ふかい。二上山のサムカイト崖地との関連のはかに、旧石器時代の集団関係及び生業活動についても考慮すべきであろう。中、小型ナイフ形石器の盛行した時期にはいると、遺跡は各地に散在し、極端な集中地帯はみられなくなる。

中、小型ナイフ形石器の盛行した時期には、石器組成が豊富になるが、増加した器種については、他地域からの影響が考えられている。国府型期終末の郡家今城遺跡では、頁岩製の先刃

型攝器があり、北陸地方との交流が推測される。吉志部遺跡でも、メノウ製の錐状石器が存在するなど、他地域からの影響が認められそうである。この時期には、淀川を通路として北陸、京都と瀬戸内地方東部が連絡をもっていたらしく、淀川流域を『淀川回廊』とよぶ考え方もある。他地域との交渉が活発化したにもかかわらず、この時期の遺跡が集中せず、散在する点も興味深い。

尖頭器群の時期には、近畿地方では尖頭器類は単独で採集される場合が多いが、吉志部遺跡の8点は、他の遺跡のそれに対して多量であり、遺跡の性格、遺跡形成の原因も問題とすべきである。小瀬ヶ沢遺跡のものに類似するⅢ類の示唆するところも興味ふくらみ、有舌尖頭器の地域性、型式分布にも注意したい。

#### 縄文時代の遺跡立地について

縄文時代の遺物では、吉志部遺跡からは石器76点等が採集されており、錐、異形石器、削器、剝片等をともなっている。著しく石器が多く、他の器種が少ない。特に土器が発見されず石器のみである点は特徴的である。吉志部遺跡の縄文時代の石器は時期を特定できないが、すくなくとも数期にまたがると考えられよう。

吉志部遺跡のように石器のみが採集される縄文時代の遺跡は、瀬戸内・近畿地方に散見される。いずれも石器が多く採集され、石核、剝片、碎片等石器製作に付随するものが、わずかにともなっている遺跡がほとんどである。それらの立地は、洪積台地の縁辺で、後世に小開拓谷に農業用堰止池を構築するような場所が多い。吉志部遺跡も同様の立地であり、これらの立地はさわめて意図的なものであろう。強いて考えるなら、これらの石器しか発見されない遺跡では、石器が大量に発見されることからハンティングサイト、またはキルサイトと想定することはできないであろうか。当然のことながら、当時の生活の場であるベースキャンプはこれらのハンティングサイトから離れた地点に存在したことになる。しかし、大阪平野ではベースキャンプに想定できる縄文時代遺跡の発見は少なく、狩場を持つべき「母遺跡」は不明である。

この点では、本来より大阪平野の縄文時代遺跡が少ないという考えは必ずしも妥当ではなく、むしろ沖積地に深く埋っているためであるという見解がある。特に河内平野は最近數千年前に急激な沖積作用により埋められたのであり、当時の自然堤防上等に立地した遺跡は、現在では地表下数mの深さに埋没していると考えられる。最近では、森ノ宮遺跡、恩智遺跡等、縄文時代遺跡が深く埋没した状況で発見されており、この見解は大勢として肯定できる状況であろう。吉志部遺跡の周辺の沖積地深くに縄文時代遺跡が存在するかどうかという点を別にして、沖積地において、より深い位置での遺跡存在について、より深い注意を払う必要があろう。ただおしみべくは大阪の縄文時代遺跡の立地を細かく考察するには、沖積地遺跡の把握の現状では充分な検討が困難である。

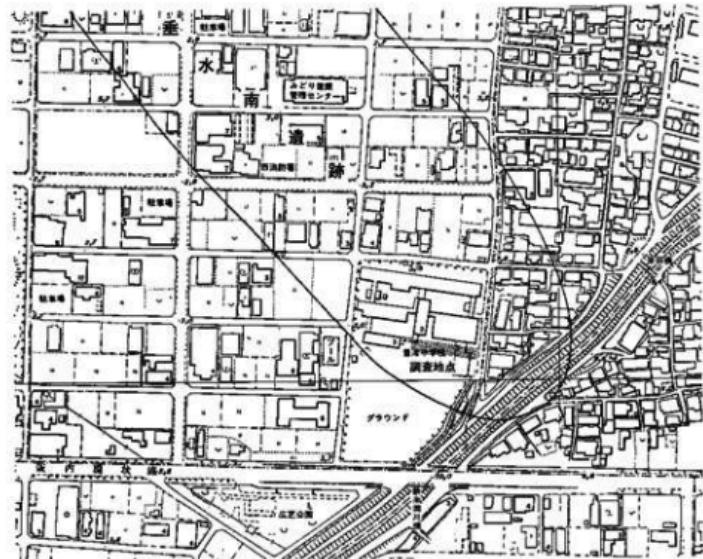
吉志部遺跡をめぐる問題について、以上のように二、三検討してみたが、今回の発掘調査は第一次のものもあり、未解明の問題をいくつも残すところとなった。特に旧石器の問題につ

いては、当初設定した3つの目標を今後も強力に押し進める必要を強く感ずるところである。吉志部遺跡は、府立吹田高校の拡張、市立第二中学校の建設等により、大きく景観が変貌した。また、周辺の宅地開発が急速に進みつつあって、残存部分に対する調査、保存の措置は緊急の課題である。

### 第3章 垂水南遺跡の調査

#### 1. 調査の目的

今年度の調査は、昭和53、54年度以来続けてきた垂水南遺跡南端確認の一環として実施したものであるが、今回は従来の坪堀りによる試掘ではなく、幅2.5m、総延長40mの長大なトレンチを設定した。その目的は第1章で述べたように、今回の調査は遺跡南端の確認にとどまらず、遺跡の東方を流れる糸田川の河床上昇と、古墳時代～中世期の遺構面の上昇を対比し、遺跡形成の過程を明らかにすることに目的があったからである。調査位置は旧豊津中学校のグラウンド北端部分で、糸田川の右岸堤防の西方50mの地点である。



第14図 垂水南遺跡発掘調査区位置図(1:5000)

## 2. 調査の成果

トレンチの土層は、校舎建設の際の盛土下に旧水田面（1層）があり、以下暗灰色砂・灰色砂・黄褐色砂等が複雑に堆積している比較的土粒の粗い軟砂層（2層）、灰色粘土層（3層）、暗灰色粘土層（4層）、黒色粘土層（5層）、少量の砂粒を含む黒色粘土層（6層）、青灰色砂層（7層）に大別される。

第2層からは、陶器片が若干検出されたのみで堆積の正確な時期の判定は困難であるが、同校内の第1次・第2次試掘調査の結果から考えても近世以降の堆積であろう。この層を掘り込んで北から南に流れる河道と思われる落込みが3条検出された。

河道①は、3条の内、東端に位置し、非常に浅い角度で落ち込むもので、幅10.28m、深さ40cmを測る。

河道②は、幅6.24m、深さ56cmを測り、断面は浅いU字形を呈する。

西端に位置する河道③は、河道②と3.2mの間隔をおき、幅7m、深さ48cmを測り、断面は浅いU字形を呈する。河道④・⑤共に河底面はほぼ同じ高さである。

いずれの河道からも遺物は検出されていないが、土層の堆積状況から、河道①が他の2条に先行すると考えられる。河道②、③の前後関係は明らかでない。

第3層は、よくしまった均質な粘土層で、トレンチ西端から2.1mの地点及び、29.5mの地点の2カ所において幅27~40cm、高さ12~20cmの南北に走る畦畔が検出された。この水田面より土師器及び土師質小皿の細片が少量検出されている（第16図5・6）。

同校内の第1次試掘調査（昭和53年度）の第2トレンチで水田畦畔及び水口が検出されているが、検出された土器の時期及び層位が一致することより、鎌倉時代後期の水田面と考えられる。

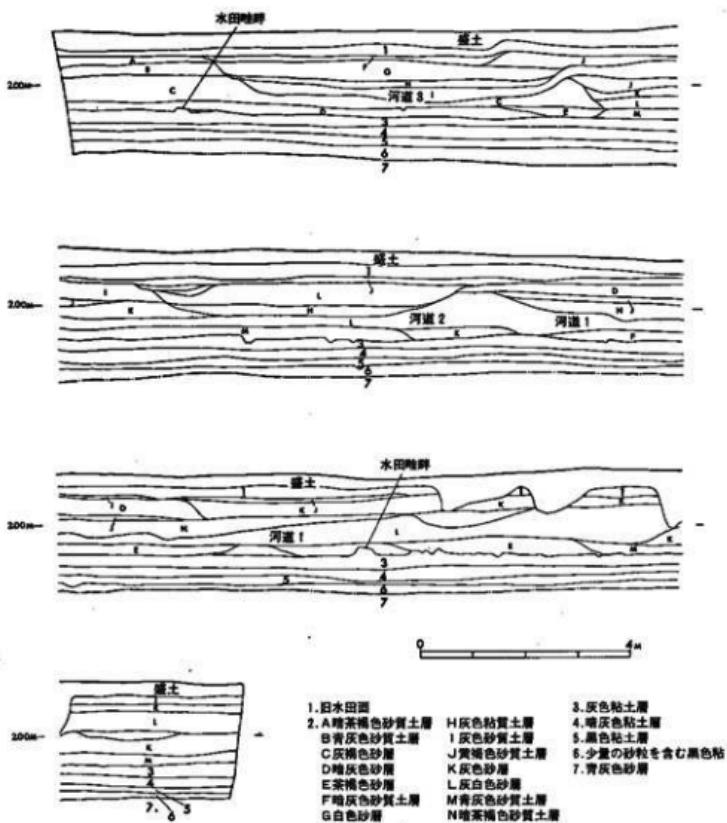
以下の4~7層では、明確な遺構は検出されていない。4層では平安時代の須恵器、土師器が、5・6層では布留式期の土師器（第16図1~4）の細片が少量検出されたのみである。

この5・6層はいずれも黒色粘土層を主体とするが、5層はスミを若干含む黒色粘土層、6層は砂粒を多く含み、やや灰色っぽい黒色粘土層で、これらの所見はいずれも他の地点における古墳時代土器包含層に大略準じた地層である。仮称豊津中学校建設とともにう校舎予定地では、本トレンチの北方40mの地点で発掘調査が行われたが、この地点では特に第5層に相当する地層より、遺構及び多量の土師器、須恵器を検出しており、したがってわずか40m離れた地点では、遺物の出土が急激に減少することが判明した。

これは、遺跡が北～南方に展開するのではなく、北西～東南に向って斜に展開するという従来からの調査所見を充分裏付ける結果となった。

第7層は青灰色砂層で、含水率の高い粗砂層であり、遺物は検出されなかった。

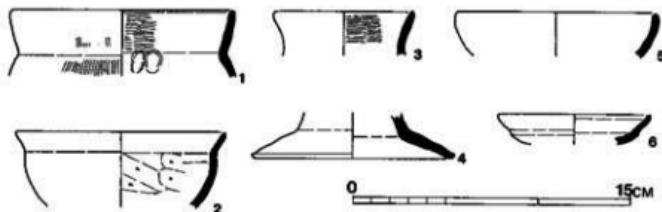
本トレンチにおける土層断面は、第2層に相当するA~Nの砂層、砂質土層を主体とする



複雑な土層の堆積に顕著な特色がみとめられる。これらは、トレンチの北壁のみで14層もみとめられる複雑なもので、成層的に堆積したものではない点において、以下に堆積した3～6層と大きく相違する。

これらの層序は、垂水南遺跡の他のいずれの地区でもみとめられておらず、糸田川に極接近する本地域にのみみられるものと考えられる。すなわち、これらの地層は明らかに、鎌倉時代後半以降における糸田川の氾濫により形成された土層であることを示している。

出土遺物については細片のため、別表による観察にとどめることにする。



第16図 番水南遺跡出土遺物実測図

No.	器種	法量	個々の特徴	色調	胎土
1	壺	口径:12.0cm (復原) 現存高:3.6cm	口縁部は内湾ぎみに上方に伸び、端部は内傾する面をなす。口縁部内面は横方向、口縁部、体部外面は縱方向の刷毛。頸部内面に指圧痕が認められる。	内面: 淡黒灰色 外面: " " 断面: "	微細な砂粒を多く含む。
2	鉢	口径:11.4cm (復原) 現存高:4.1cm	口縁部はやや外湾ぎみに上方に伸び、端部は丸くおさまる。口縁部、内外面はナデ、体部内面は横方向の施削り(右→左)。頸部より若干下方に粘土帶接合痕が認められる。	内面: 淡黄褐色 外面: " " 断面: "	2mm位の砂粒を含む。
3	盃 (口縁部)	口径:7.4cm (復原) 現存高:2.4cm	口縁部は外半しながら上方に伸び、端部は丸くおさまる。 内面は横方向の刷毛。	内面: 黒灰 色 外面: " " 断面: "	1mm位の砂粒を含む。
4	高杯 (脚部)	底径:10.6cm (復原) 現存高:2.4cm	脚裾は内湾ぎみに下り、端部が上方に屈曲する。	内面: 暗茶褐色 外面: " " 断面: 黑灰色	2mm位の砂粒を多く含む。
5	楕 (土師器)	口径:10.8cm (復原) 現存高:2.4cm	口縁部は内湾しながら上方に伸び、端部近くではほぼ垂直に上る。 端部は丸くおさまる。	内面: 淡黄褐色 外面: " " 断面: "	1mm位の砂粒を含む。
6	土師質皿	口径:8.2cm (復原) 現存高:1.6cm	底部から口縁部にかけて、途中に股を有して、内湾ぎみに上方にのび、端部は丸くおさめる。内外面ともにナデ。	内面: 灰白色 外面: " " 断面: "	微細な砂粒を若干含む。

付表1 番水南遺跡出土土器観察表

### 3. 結 論

以上の所見から、今回の調査の主要な目的であった遺構面上昇の経過を簡単に考察してみる。

まず、遺跡南端については、今回の調査及び55年度末に実施された校舎建築に伴う事前調査の成果とをあわせ考えるならば、古墳時代については、今回の調査区の(4)・(5)層から布留式期の土師器が少量出土しており、旧豊津中学校は遺跡範囲内と判断しうる。ただ濃密な土器群に限定すれば、今回の調査区では認められず、校舎予定地の調査では、同校敷地内の北東部において、西北から東南にむけて走る溝及び土器群に限られる状況となる。したがって、多数の土器を伴う主要遺跡範囲は、同校の旧正門付近から斜めの西南方向にむかって延び、さらに同校の

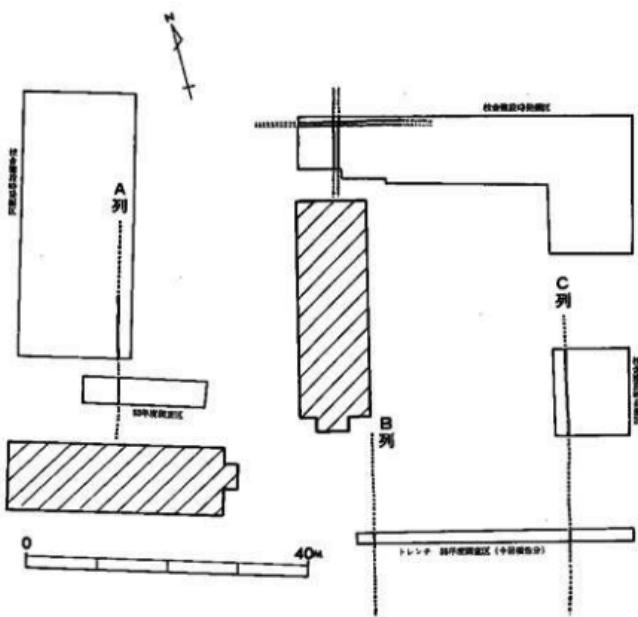
東側にも及んでいると考えられる。

南端については現在の運動場にまで調査範囲は拡大されていないが、今回の調査区遺物の稀薄さからみて、少量の遺物を含む包蔵地であることは間違ひなかろう。この所見は、一時期下った平安初期すなわち、(3)層についても同様であるとみられる。遺跡が北西より南東へと展開している実状より、遺跡の東端については、依然不明な点が多い。現在の糸田川よりさらに東方へ展開する可能性も残存しているが、この点については、本中学校跡の校域外にも調査の対象を移さなければならない。遺跡がより東方に展開した場合は、糸田川の左岸東方約250mの地点に金田遺跡があり、布留式土器の出土が伝えられている。<sup>註</sup> 時期的にも本遺跡と同時期と考えられ、両遺跡の関係について、今後の問題となろう。

つぎに、遺構面の上昇の経過について述べてゆきたい。灰色粘土層(2)の状態に注目してみると、この層は遺物をほとんど含まないよくしまった均質な粘土層で、トレンチ西端から2.1mの個所及び、東端より8.2mの個所の計2個所に水田畦畔が検出された。これは同校内の第1次試掘調査(昭和53年度)の第2トレンチで検出された水田畦畔や水口と同様であり、層位も一致するところから、鎌倉時代後期の水田面と判断することができる。したがって、これら試掘調査の成果によると、鎌倉時代後半の当地は、南北に走る小畦畔を有する水田地帯であったといえる。

さらに、仮称豊津中学校建設とともに本遺跡の発掘調査において、やはり同様な水田畦畔を検出しているので、それらを考え合わせるならば、水田畦畔の状況がより明瞭に把握できる(第17図)。特に第2区では南北方向の小畦畔に対して、東西方向に走る小畦畔を検出し、畦畔の交叉点を検出したことが注目される。しかもこの交点部分は、明らかに2層の畦畔の重なりがあり、わずかにずれるものの、ほぼ同一点で畦畔の交点が保たれていたことも判明した。ただ他の試掘調査においては、この新旧2時期の畦畔のうち、新しい段階のものしか検出していない。<sup>註</sup>

これら水田畦畔の位置関係をみると、今回の調査が細長いトレンチ調査の所見で、これら小畦畔が必ずしも平行に走るとは断言できないが、現在の南北の条里ラインに合致すると仮定し、先の昭和53年度の検出畦畔をAライン、今回の調査で検出した小畦畔のうち西側のものをBライン、東側のものをCラインとすると、A-B間は35.6m、B-C間は27.4mを測る。これによると、各小畦畔間は同一でなかったことが判明する。ただ、これらの距離を一坪(109m四方)の条里区画に対比すれば、A-B間は $109 + 35.6 = 3.061$ 、B-C間は $109 + 27.4 = 3.978$ となる。すなわちいずれも完数に近い数値で割れ、A-B間は一坪の3分の1に、B-C間は一坪の4分の1ということができる。歴史時代の水田小畦畔の調査所見としては群馬県高崎市所在条里遺跡でも水田小畦畔は必ずしも一坪を6等分したものでないことが明らかにされているが、今回の垂水南遺跡でも、やはり同様な所見を示したといえる。ただ、今まで検出されたこれらの水田畦畔は、最小水田単位を画すると思われる小畦畔にとどまっており、水路を配する条里遺構といえるものは鎌倉時代においてさえも検出されていない。ただ、旧豊津中学校



第17図 水田小畦畔位置図

内の第一次試掘調査において、第2トレチより検出された水口において東から西に落とされた痕跡が明らかにされているので、水田は東側が高く西側が低かったといえるが、これは、現在の地形から読みとれるとおり、東方へと糸田川堤に向うにしたがって、水田面が高くなることを示しているにすぎない。このような水田畦畔の検出は、現在の段階では旧豊津中学校内の調査に限られており、本遺跡の他の地点において検出された経過がなく、鎌倉期における本地域の水田畦畔の復元には、まだ多くの調査を必要としよう。

つぎに本遺跡における遺構面の上昇の経緯とその歴史的な意義をみてゆくが、まず本遺跡の各期の様相をⅠ～Ⅳ期に区分して概略をのべる。

**第Ⅰ期** 過去20次にわたって実施された調査の成果によると、遺物包含層の最下層はすべて青灰色砂層で含水率が高く、生活に適した土とはいえず、遺構面はない。遺物としては、布留式土器を包含するから、古墳時代の所産であるが、稀に弥生中期の土器を検出することがあり（第1・6次調査）、周辺に弥生遺跡の存在を示唆する層位である。

**第Ⅱ期** 古墳時代の土器包含層には、調査地点によって大きな密度の差があり、住居址・土塙・溝等の遺構に多量の遺物をともなう個所と、概ね2～3層の暗灰～黒色土層の堆積があり

少量の遺物しか出土しない個所に分かれる。従来の成果によれば、前者は今回のトレンチ調査地点の北20m地点を南限として、北から西へ約30度振った角度で、北西方向へ600mにわたって展開していることが確認されている。後者は前者の周辺にみられるもので、水田か、あるいは湿地様の状況を呈していたのではないかと考えられる。ただ、第8次調査で検出された矢板列などからみれば、整然と区画された水田の存在を予想することができる。古墳時代遺構として検出される住居址・溝・矢板列のいずれをみても、すべて北西方向に振っており、さきに述べた遺構の展開方向に合致している。ここには、当時の自然排水に大きく規制された姿を見ることができる。このことから、弥生～古墳時代では、当地の三国川、及び糸田川等の大小河川の双方に対しても、流路を固定するような大規模な治水が行なわれていないと考えられる。

**第Ⅲ期** 第Ⅲ期をすぎると、遺構・遺物の検出はほとんどみなくなるが、C-7地区河道内などで、稀に6世紀後半代の遺物を検出することがあった。しかし実態は不詳である。

**第Ⅳ期** C-7区における第2次調査で河道底部より、所謂白鳳期のものとみられる粗い格子叩き目をもつ平瓦が出土し、周辺に寺院跡の存在する可能性を示した。該時期については、これ以上の実態は不明である。この河道はN-113°Eの方向をもち、南東に流れる。

**第Ⅴ期** C-8区における河道内堆積土より弘仁3年(812)立荘の「垂水庄」を明記した墨書き土器の一群が検出され、共伴土器の年代觀からも、8世紀初頭の土器群であることが明らかとなるなど、重要な所見を示した。第1次調査と第5次調査では、本期の東西に流れる河道を明らかにしている。第5次調査では北から南に流れ、一部で護岸を伴う河道が検出され從来の北西～南東方向の河道が、ここにきて変化していることがわかった。しかし建物址や溝などの生活に即した遺構の検出がなく、水田跡等の検出もない。また立荘以後の莊園經營が継続されていたことを証明する遺物や建物址も検出されておらず、短期間の土器群である。

**第Ⅵ期** 今回報告したトレンチ調査において検出された鎌倉時代後半の水田跡等の時期。本遺跡の他の地点では黄褐色～暗灰色粘土層の検出をみており、小片の瓦器が稀に混入していることがあるが、跡等の検出はなかった。

**第Ⅶ期** 表土直下の粘土層、あるいは砂礫層から近世の陶磁器片を検出することができる。今回報告した3条の河道状落ち込みもこの時期に該当するが、他の調査では遺構として判断できるものは、第7次調査において検出した井戸群のみである。

以上の各期の土層序をみると、Ⅰ・Ⅱ期については既に述べたように、各地点における堆積状況は一的なもので、標高差もみとめられない。Ⅲ期の実態は不詳である。Ⅳ・Ⅴ期についても、河道跡の検出のみで、生活面は検出されていないが、Ⅵ期の直上に河道の掘削面があり大きな地盤上昇の事実はない。

土層の堆積状況が調査地点で相違をみせるのは、このⅥ期以後で、C-7、C-8区あるいはB-3区などでは、Ⅲ層直上にⅣ期の土層が堆積し、Ⅴ期の土層は、その間にわずかな間層を示すにすぎないが、遺跡の東南部にあたる今回の調査地点では、20cm前後の暗灰色粘土層と

なっており、ここでは地盤上昇の兆候がみえる。

次に水田畦畔を検出したⅣ期になると、水田面の高さでは、最も糸田川に接近する今回の設定トレンチの東端において、昭和53年度検出の水田面より4cm高いだけであるが、この中世水田面から現代（区画整理前）の水田面までの比高では、0.93m～1.26mとなり、現水田面の地盤の高低差は、主として鎌倉時代後半以降の土砂の堆積差であることがわかった。この地域が東側にゆくに従って地盤を上げるのは、糸田川の土砂の堆積作用によるものであり、これは糸田川の河床の上床、すなわち天井川化してゆく経緯に対応するものと考えられる。この点については、既に昭和51年度の調査の際にも、糸田川の固定化の時期は、早くとも古代末、おそらくは中世期におけるものであろうことを指摘しておいたが、今回の成果は、さらに鎌倉時代にかなりの地盤上昇の契機があり、その際にはすでに条里にともなう水田畦畔が設置されていたことを明らかにした。

それでは、これら考古学的所見によって得られたⅠ～Ⅲ期における本遺跡の動向は、当地における歴史的な動きにどう対応するであろうか。古代文献上、当地の地名が現われているのは新撰姓氏録左京皇別に列せられた「垂水公」と、そこに記された「垂水神社」である。行基年譜には、行基の設置した布施屋9個所のうちに、垂水布施屋があり、奈良時代前期～後期における当地の性格の一端をみるとることができる。これは、おおむね本遺跡のⅠ～Ⅲ期に該当する。

次に当地周辺にみられる条里区画は、いつの時期に施行されたであろうか。文献上布施内親王の蟹田を東寺に施入したのが、弘仁3年（812）で（東寺領垂水莊の成立）、この時、民部省符案には「在豊鳴郡中條」とあるから、平安時代初頭に豊鳴中條が成立していたのはたしかである（Ⅳ期）。末中哲夫氏は当地における条里坪地割が長地形であり、古い態様を呈していることより、当地における条里方格の決定時期を大化前代と想定した。<sup>39)</sup>他方考古学的成果から、これらの事実を認めようとすれば、当遺跡では、鎌倉時代の水田畦畔が条里関係遺構としては最古の例である。この間を埋める資料としては、墨書き土器を出土した河道（C-8区、Ⅳ期）及び、白鳳期平瓦片を出土した河道（Ⅳ期）などがあるが、Ⅳ期の河道は概ね北から南に流れるもの（第5次の所見）と東西に流れるもの（第1・5次の所見）の双方も検出されている。Ⅳ期の河道はN-113°-Eの方向に流れ、これは古墳時代Ⅱ期の遺構の方向におおむね一致している。<sup>40)</sup>これらの河道は、いずれも完全に発掘されたものではないが、幅が8m以上もある大きなもので、当地の排水のためには大きな機能を持たしたと思われる。条里制の中でこの双方の河道のはたした役割がどのようなものであったかは部分的な発掘があるので判然としないが、少くともⅣ期の河道の方向は、条里遺構に合致せず、古墳時代以来の自然の流路に合致しており、これは、当地における大化前代の条里施行説にとって問題を提示することとなる。C-8区の調査事実からすれば、奈良前期（白鳳期・Ⅳ期）と垂水莊立莊（Ⅳ期）の間に、始めて河道流路が条里遺構に合致するものが出現したといえる。

つぎに、糸田川の固定の時期について考えると、文治5年の「攝津垂水西牧権坂郷田農取帳」

(大田文)によると、垂水西牧櫻坂郷の東の境界は、現在の糸田川の流路に一致しており、かつ、地図に「堤」があるから、糸田川堤をなしていたのは明らかであり、このことより、平安時代最末期には、すでに現在の河道に固定されていたと推測できる。

先述したように、発掘調査の成果によれば、天井川の固定によって、糸田川に近づくにつれて地盤上昇がみられると判断し、その層位を、鎌倉時代後半の水田面下の平安期の粘土層に遺跡の東へゆくにつれてわずかながら層厚が増加する現象があり、またこの水田面が埋戻されてから地盤が急上昇することを明らかにした。これは、糸田川の固定化への努力が、鎌倉時代後半期を前後する時期に、ひとつの面期をなしていたことを証明しており、先の大田文による河道の推測を大略裏付けているのではなかろうか。

以上の観点から、現在までの発掘調査の成果による限り、

1. 条里制に合致した河道跡は、平安初頭にあらわれるらしいこと。
2. 条里に合致する小水田畦畔は鎌倉時代にはじめてみられる。
3. 現存と同じような位置での糸田川の固定は中世初頭には行なわれていたこと。

などを明らかにすることことができた。今後各所の条里関係遺構を追求することによって、さらに詳細な事実をしらべることができるようになるであろう。

なお、西方の豊中市域については、発掘調査において、既に早くから豊嶋条里についての注意がはらわれていることを付言しておく。

弥生時代中期の木棺墓群を検出して注目された豊中市勝部遺跡において、現代の水田畦畔をはじめとする条里方格の地割りは、平安時代～鎌倉時代に造成したと思われる整理層よりは古くならない点が指摘され、豊嶋郡条里の実施時期について、再検討の必要性を説いた。

また、垂水南遺跡から、わずか西方2kmに位置する利倉遺跡では、D-5・E-5地区の古墳時代水路は東北東から西南西にむかって流れるが、D-2・F-2地区では、北から南にむかって流れる水路が検出され、またその水路岸で検出された掘立柱建物址は、平行を東西にするものであり、条里による方格規制をうけているとみられる。しかし、これらは、出土遺物からみて室町時代のものとされており、古代には及ばない。また、兵庫県・大阪府境にある原田西遺跡では、条里に関連する遺構として、豊嶋・河辺郡境に位置するとみられる溝状遺構が検出されているが、これは近世初頭のものとされている。

このような事例をみると、豊嶋郡条里が大化前代にまで遡りうる資料は、今日いすれにおいても検出されておらず、明確な条里にかなう水田遺構は中世期になって、初めて検出されているようである。今後の問題は大化前代から古代末までの間にしほられるが、文献上で東寺領垂水庄の範囲を初めて具体的に記す長保2年(1000)11月26日の「東寺宝藏目録注進」を、どれだけさかのぼって条里遺構が検出できるかが、一応の目安となろう。

以上の記述から明らかなように、文献上に記された「条里制」と、考古学的調査によって出現する「条里遺構」とを短絡的に結びつけることは多くのケースにおいても困難が生じている

ことがわかる。もっとも、豊中市の勝部遺跡で指摘されたような、条里制がいつ施行されたかという条里起源の問題もさることながら、条里施行後の農民の活動の実態も重要で、条里制をその具体的な形で土中に残された条里遺構として把握する考古学調査の場合、むしろ、本遺跡例のように後者について、より重要な所見を示している場合が多いことも念頭におくべきである。

豊島郡から東に眼を転じて、摂津國島上郡の安瀬において実施された条里遺構調査では、明らかに奈良時代には条里畦畔が築成され、乾田化が進んでいるにもかかわらず、中世の一時期には、溼田に逆もどりしているという注目すべき所見が明らかにされている。調査者は、この現象について、河川流路の自然条件の変動とともに土壤環境の変化のほか、灌排水施設の変化・用水施設の荒廃などを導くような人間社会の変化をあげるが、このような例をみても、古代からの水田經營は安寧としたものではなかったのである。

重水南遺跡においても、たしかに古代以来の農民の乾田化への努力の成果が、本調査で明らかにされたような鎌倉時代後半の水田畦畔の整備によって、一応の段階に至ったとみるべきかもしれないが、その経過については、高槻市安瀬例をあげるまでもなく、順調なものでなかつたであろうし、また、応永10年（1403年）の『摂津復坂郷名主百姓等申状』にみると、田畠の荒廃は以後においても常に考えられる事態であったはずである。他方、高槻市安瀬庄における春日社領の退転、衰退が記されるのが応永年間であるとの指摘を考えると、中世期の一時的な湿地化の現象を示した安瀬遺跡の考古学上の事実は、より一層興味を覚える。同様に、重水南遺跡において考えてゆこうとすれば、当地においては何よりも東寺領垂水庄の成立、そして東寺による一円支配の強化・確立という支配体制の変革を無視することができないわけであり、ここにみた水田形態の動向も、今後、これらの情勢を充分に加味して考えてゆかねばならないのである。

## 第4章 垂水遺跡の調査

### 1. 調査に至るまでの経過

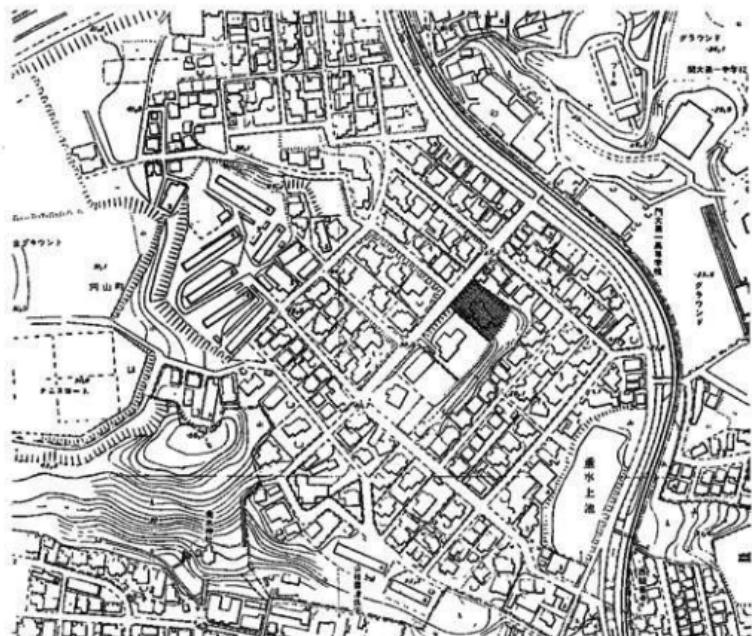
垂水遺跡は、千里丘陵の最南端に位置する弥生時代高地性集落として重要な位置を占める。遺跡は、吹田市垂水町1丁目222番地の垂水神社境内地を南限として、その北方の神社背後丘陵一帯の円山町にかけて展開し、遺跡の範囲は、東西600m、南北400mの広範に及ぶ。

遺跡の発見は、昭和初期にさかのぼり、おりから当地一帯で進行しつつあった円山町住宅地の開発にともなって、弥生土器の出土があり、在地の戸坂甚英氏によって報告がなされ、京都大学の島田貞彦氏等が現地を踏査した。その成果は『摂津國豊能郡垂水先史時代遺跡』として昭和5年発表され、本市において学界に紹介された最初の遺跡となった。

その後、いくつかの所見を見るが、正式な発掘調査のなされた形跡はない。

昭和30年すぎから「日本生命千里山総合グランド」の建設とともに、垂水神社背後の丘陵地帯が大きく削平され、円山町の開発以後も、ほとんど旧状を変えることなく保存されていたと思われる遺跡の西半分が消失し、これによって、遺跡の大半は漸減的な破壊を被ったと考えられる。この工事で出土遺物は弥生土器・石器を主とする膨大な量に及び、収集された資料は、垂水町2丁目住の若村正博氏をはじめ、市内の各所に所蔵され、今日に至っている。またこの時、関西大学が、その造成地の一部を発掘調査し、堅穴式住居らしいものを検出したが、造成地全域の解明には至らなかつたらしい。本グランドの完成によって、遺跡周辺の開発行為は、一応の小康を得るに至ったが、同時に、本遺跡の調査も充分に成果をあげることなく、不充分なままに終っていたのである。

本遺跡が計画的な発掘調査を受けたのは、その後約15年を経た昭和48年である。おりから進められていた市史編さん事業の一環として、関西大学考古学研究室との共同調査として、旧状を保っていた唯一の地域である垂水神社境内地に対して、発掘調査が実施された。この調査では弥生時代後期の住居跡1棟と焼土礎を検出し、本遺跡では初めて明確な遺構を検出するとともに、これまでの調査では見つかなかった、縄文時代後期の住居跡が複数検出された。



第 18 圖 重水遺跡發掘調查地位置圖 (1:5000)

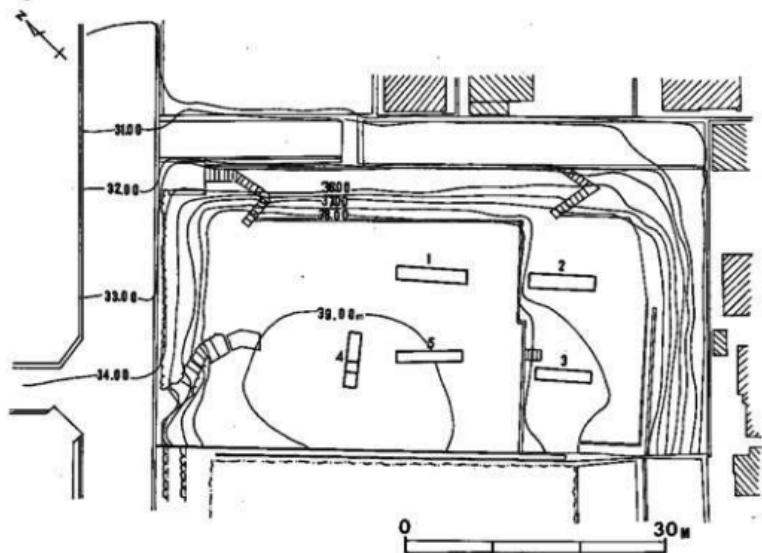
もに、室町時代を中心とした中世期の遺物を検出し、弥生・中世の遺物を包含する複合遺跡であることを明らかにした。

この調査は、昭和49年以降、市教育委員会に引継がれ、市教委・関西大学との共同調査が、昭和51年10月に至るまで、4カ年（5次）にわたる発掘調査が継続された。この調査では弥生時代後期の住居跡4棟、掘立柱跡、焼土壙、土墳墓などを検出し、前期～後期様式の弥生土器の出土をみた。中世期については、墓跡・小建物跡・廻跡などの検出をみた。

開発行為にともなう調査としては、この間はほとんど見るべきものではなく、ごく最近に至って昭和55年12月に垂水神社社務所の東方、垂水町1丁目11-14で行われた試掘調査では、弥生土器及び、鎌倉～室町に至る土壙、溝が検出され遺跡は丘陵上に止まらず、南方へは丘陵裾まで展開していることが判明した。この地点については、昭和56年度の夏期に本格調査の予定である。

円山町地域については、円山町9-4、15-5、31-16、749-14などで、小規模な試掘調査や、立会い調査が実施されたが、いずれも、遺構・遺物は認められていない。

このたび、円山町370-3で、住宅建設の計画があり、市教育委員会と協議するなかで、当該地点は、さきに島田貞彦氏が史前学雑誌上に発表した土器出土地点に近く、遺跡範囲内と考えられる点や、建設工事が個人住宅であることに鑑み、本遺跡の遺跡範囲及び、遺物包含状況の確認の一環として、試掘調査を実施したものである。



第19図 垂水遺跡発掘調査区位置図 (1:800)

## 2. 調査の成果

**位置** 調査地点は、遺跡推定範囲の北東端にあたる。この付近は既に宅地化されているため、旧来の地形は知り得ないが、当地の開発前の状況を、明治18年発行の仮製地図によって復元してみると、千里丘陵の吹田市側の最高地点（標高83.1m）が、現在の千里山西3丁目にある。ここから南南東に向って尾根が走るが、垂水遺跡は、ちょうどこの尾根が神崎川の沖積平野に突出するところにあり、東と西に支尾根を配しながら、西に向きをかえ、尾根が沖積平野に平行するように走る。この丘陵の末端が重水神社の境内となっており、周辺で旧地形の残されている唯一の地域である。

今回の調査地は、その東方にあたり、最高地点から南南東に下ってくる主尾根が、沖積平野に行きつく直前に、いくつかに分岐する尾根のうち、最も東に突出するところであり、現在の阪急電鉄千里線の走る谷に向って張り出したところである。調査地点は、尾根頂部からやや東に下った地点であり、丘陵斜面が東へ向って急速に下り始めるところである。本地点からは北から東にかけて眺望が開けている。

調査地では、東西64m、南北34mの長方形で、住宅一区画分にあたり、西側は石垣と擁壁に囲まれていて、旧地形は知る由もないが、本地点の道を隔てた西側が高いため、北東～東～東南に向けて下り始めた丘陵傾斜面の上方をカットした造成地であろう。該当地は約2mの高低差をもつ造成面で、その上面の中央に39mのコンターラインが回るが、これも旧地形を削平した部分で、本来のものではない。ただ北側に4mの切通し、東側に6mの切通しがあるところから、やや急な丘陵の斜面であったことが窺えるのみである。

**トレンチ調査の所見** 調査対象地に5ヵ所のトレンチを設定し、遺構・遺物の検出に努めたが、各トレンチとも1点の遺物すら検出することができなかった。とりあえず、各トレンチの状況を説明する。

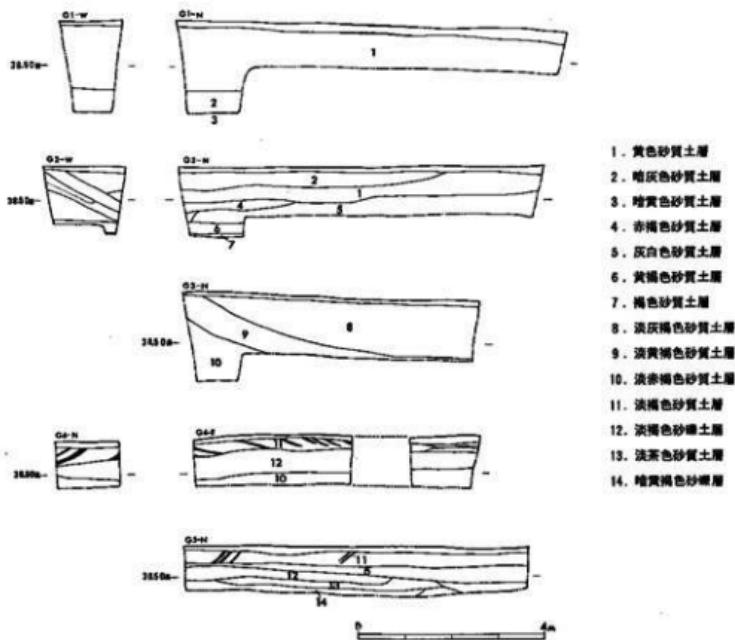
**G1** 長さ8.4m、幅1.4mのトレンチ。表土層下は軟質の均質な黄色砂質土層が厚さ1.3mにわたって堆積し、以下やや硬質の暗灰色砂質土、暗黄色砂質土が整層的に堆積する。

**G2** 長さ7.8m、幅1.7m。G1の延長線上に設定したトレンチである。トレンチの縦断方向にあたる北西～東南方向には、整層的に暗灰色砂質土以下の砂質土が堆積するが、トレンチ横断方向は、約30度の急傾斜で北東方向に落ち込み、不安定な層序をみせる。

**G3** 長さ6.3m、幅1.4mのトレンチで、G1・G2ラインの西南9.2mに設定したものである。淡灰褐色砂質土、淡黄褐色砂質土、淡赤褐色砂質土が、傾斜にそってゆるやかに、落ち込むように堆積している。

**G4** G3・G5トレンチのラインに直交する位置に設定した。調査地の最高所にあたり、もとより旧地形を残存する場所ではない。またこのトレンチは、旧建造物の基礎部分とも重ったため充分な調査ができなかった。

地表直下に不整合な礫層が堆積しているが、これは宅地造成時の盛土であろう。以下淡褐色



第20図 重水遺跡トレンチ土層断面図

砂砾土層・淡赤褐色砂質土層が順次堆積する。

G5 G3の延長線上に設定した長さ7.2m、幅1.4mのトレンチである。層序はG4と色調を異にするのみで、本質的には変らない。

### 3. 締 語

今回の調査において設定した各トレンチから遺構・遺物は全く検出されなかった。各トレンチで確認された土層序も、地表に近い土層は宅地造成時における二次堆積土を除くと、すべて地山洪積層（大部分は砂層）で、該当地においては、宅地造成時に、大きく削平され、旧表土が残存している可能性は全くないといえる。調査地点の東北側に高さ6m、南西側に高さ4mの擁壁を構築してあることも、そのことを証明しているといえよう。したがって本地点が重水遺跡の範囲内かどうかについても、今回の調査では判然としない。

昭和5年の史前学雑誌上における島田報告にみえる弥生土器出土地点は、付図からみる限

り、現在の重水上池西側丘陵上と判断されるところから、今回の調査地はやや東北に位置するものの、そう遠くはない同一丘陵上と考えられる。

しかし、先年行われた円山町9—4の試掘調査と同様、全く遺物等の検出をみなかつことより、今後もこの周辺地で遺構・遺物の検出できる可能性は、かなり後退したといえよう。

円山町周辺における試掘調査の契機が、今回の場合のようにほとんど個人住宅の建替等の機会に限定される現状においては、調査面積や調査方法に大幅な制約があり、今後の調査についても諸々の困難が生ずるものと思われる。

### 〔註〕

#### 第1章

1. 吹田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報』1977年  
吹田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報』1978年  
吹田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報』1979年  
吹田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報』1980年  
などが刊行されている。
2. 吹田市史編さん室・関西大学考古学研究室『垂水遺跡第1次発掘調査概報』1975年  
吹田市教育委員会・関西大学考古学研究室『垂水遺跡第2次発掘調査概報』1976年  
吹田市教育委員会・関西大学考古学研究室『垂水遺跡』1976年  
などがある。

#### 第2章

1. 秋枝 芳「吹田市吉部遺跡採集の石器について」「吹田の歴史」第2号 1974年
2. 松藤和人「近畿西部・瀬戸内地方におけるナイフ形石器文化の諸様相」「旧石器考古学』第21号 1980年
3. 市原 実「大阪層群と大阪平野」「URBAN KUBOTA」第11号 1975年
4. 秋枝 芳・山口卓也「先土器・獨文時代」「吹田市史」(第8巻別篇) 1981年
5. 註(4)と同じ
6. 富成哲也・大船孝弘「郡家今城遺跡発掘調査報告書」1978年
7. 富成哲也・大船孝弘「津之江南遺跡発掘調査報告書」1976年
8. 四手井晴子・田代克己・西谷 正「大阪府高槻市琴原遺跡発見の石器について」「考古学研究』第39号 1964年
9. 松藤和人「土器以前の文化」「大阪府史」(第1巻) 1978年
10. 大船孝弘「三島地方の旧石器時代について」「津之江南遺跡発掘調査報告書」1976年
11. 註(4)と同じ
12. 潤川芳則「大昔からくらわんかまで」1975年
13. 片山長三「枚方の遺跡と遺物」「枚方市史」1967年
14. 浜田耕作「河内国府石器時代遺跡発掘調査報告」(京都帝国大学文学部考古学研究報告第4冊) 1920年
15. 渡辺 譲「大阪府立木林市鏡出土繩文土器」「古代文化」第23巻第3号 1971年
16. 難波宮址顕彰会「森の宮遺跡第3・4次発掘調査報告書」1978年
17. 豊中市教育委員会「勝部遺跡」1972年
18. 兼康保明「八雲遺跡」1976年
19. 東奈良遺跡調査会「東奈良」1981年

20. 次田市史編さん室・関西大学考古学研究室『垂水遺跡第1次発掘調査概報』1975年
21. 藤原 学・福本 明『大人遺跡』1979年
22. 次田市教育委員会『次田の文化財第2集』1975年
23. 次田市教育委員会『次田の文化財第1集』1974年
24. 2、3、4、6については次田市史考古編にも収録されている。
25. 本稿の一部は「次田市史」第8巻別編と一部重複し、その不足を補なうものである。
26. 本稿における石器分類は、次田市史考古篇中の分類とは若干異なり、数量が変化したが、基本的にはほぼ同様である。
27. 錦木義昌・高橋 義「瀬戸内海地方の先土器時代」『日本の考古学』第1巻 1965年
28. 註(2)と同じ。
29. 山口卓也・真野 修「神戸市垂水区における旧石器」『旧石器考古学』第21号 1980年
30. 秋枝 芳「姫路市における先土器時代について」『旧石器考古学』第21号 1980年
31. 辻本充彦「三島地方探集の石器」『大阪文化誌』第3巻第2号 1977年
32. 錦木義昌「無土器文化・縄文文化」『家島群島』1962年
33. 柳田俊雄「瀬戸内東部及び近畿地方における旧石器時代研究の現状と問題点」『プレリュード』第20号 1977年
34. 沢 弘・増田進治「福井県鳴鹿遺跡出土の旧石器」『考古福井』第1号 1968年
35. 小林達雄「長野県筑摩郡飯田村桃又遺跡の有舌尖頭器とその範囲」『信濃』第19巻第4号 1967年
36. 江坂輝弘「愛媛県上黒岩洞穴」『日本の洞穴遺跡』1967年
37. 中村孝三郎『小瀬ケ沢洞窟』1960年
38. 高松義雄・山口卓也「但馬地方における旧石器について」『兵庫考古』第13号 1981年
39. 山口卓也「和歌山市東大池遺跡探集の旧石器・縄文時代の遺物」『古代史の研究』第3号 1981年
40. 渡辺 駿「低地の縄文遺跡」『古代文化』第30巻第2号 1978年
41. 瓜生堂調査会『恩賜遺跡発掘調査概要報告書』1981年

### 第3章

1. 次田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報Ⅰ』1979年
2. 次田市史編さん委員会『次田市史第8巻(考古篇)』1981年
3. 古い畦畔の時期については、出土遺物が分明でなく、不明な点もあるが、層相からみて、さほど古い時期に比定せなければならないとは考えられない。
4. 田島桂男・横倉興一「群馬県高崎市所在条里制水田址」日本考古学協会第47回総会資料 1981年
5. 井上 薫「行基」1959年
6. 垂水神社については、境内地の発掘調査によると、出土遺物は、弥生時代・中世期のものに限られている。ただ昭和55年12月から行われた神社東側の発掘調査では、鎌倉時代後半以降の遺物が出土している。
7. 弘仁3年12月19日 民部省符案「平安遺文 古文書編卷1」第35号文書
8. 末中哲夫「古代の畫中」『豊中市史本編第1巻』1961年
9. 次田市教育委員会『垂水南遺跡発掘調査概報』1977年
10. 『鎌倉遺文』第376・377号文書
11. 豊中市教育委員会『勝部遺跡』1972年
12. 利倉遺跡調査団『利倉遺跡』1976年
13. 萩名川流域原田下水処理場遺跡調査団『原田西遺跡・萩名川流域下水処理場蛇腹に伴なう調査報告』1981年
14. 京都大学安満遺跡調査団『高槻市安満遺跡の条里遺構』1973年
15. 『大日本史料』7の6 第96号文書
16. 高槻市史編さん委員会『中世の高槻』『高槻市史第1巻(本編Ⅰ)』1977年

図版第一  
吉志部遺跡景観



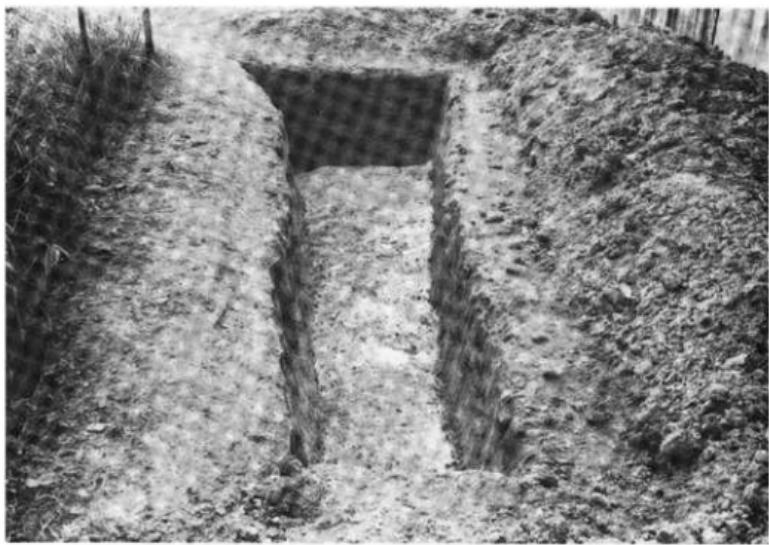
吉志部遺跡航空写真（昭和49年撮影　上が北）



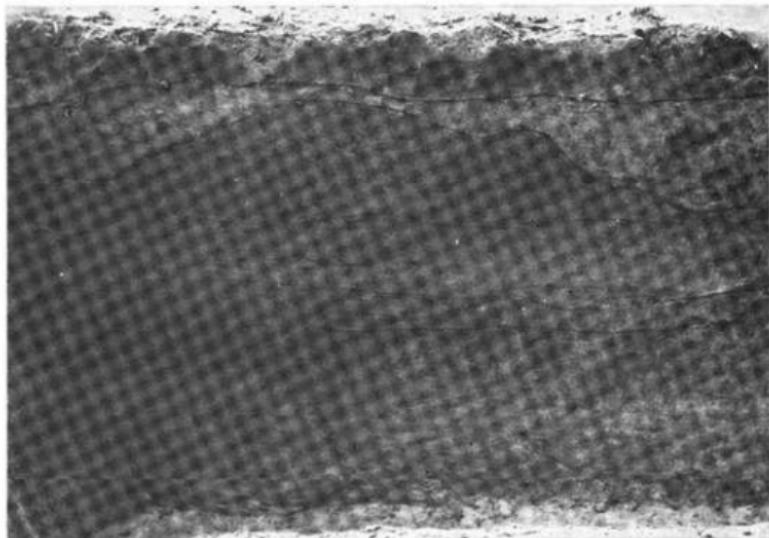
南東方向からみた遺跡の現状



西からみた G4・G5・G6・G7



G 1 北方向から



G 1 南壁土層断面



G 2 西方向から



G 2 北壁上縫断面



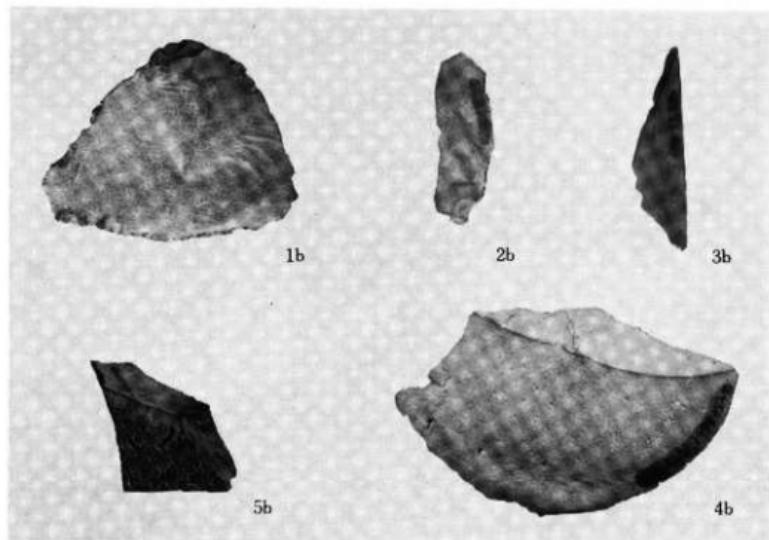
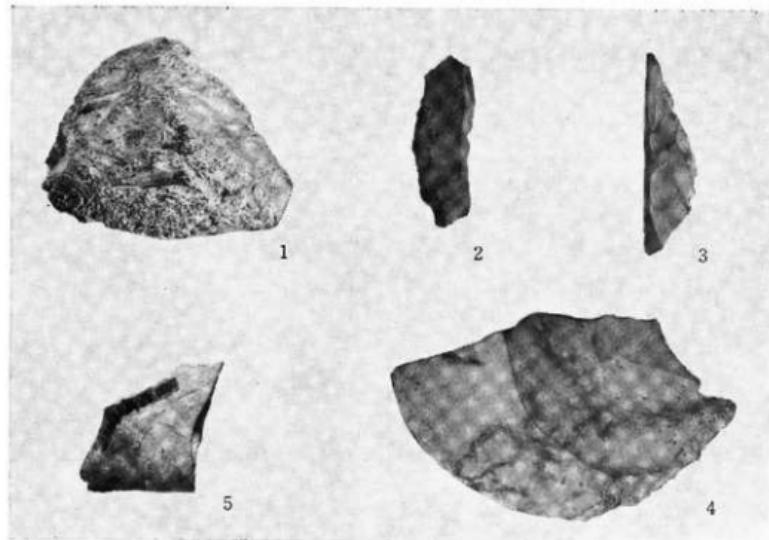
G 2 遺物出土狀況



G 8 土層斷面

圖版第六

吉志部遺跡出土遺物



國版第七 垂水南遺跡景觀



垂水南遺跡航空写真（昭和49年撮影 左が北）

図版第八  
垂水南遺跡近景・試掘場

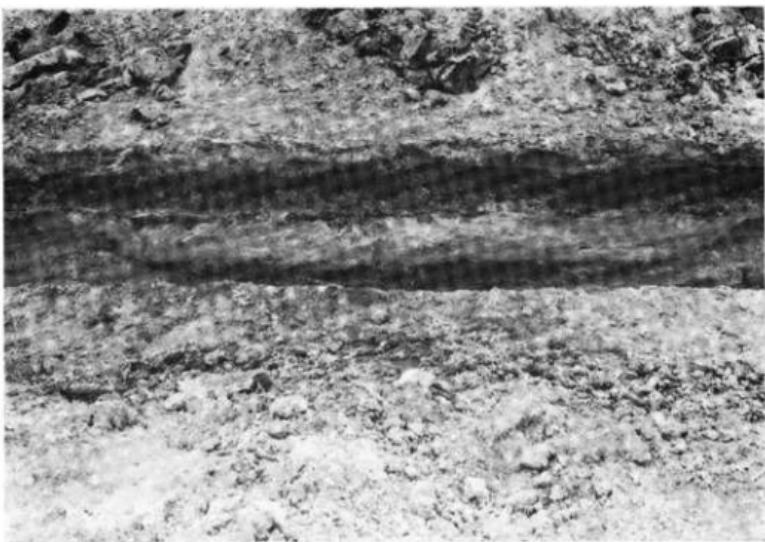


調査地点景観（東南より）

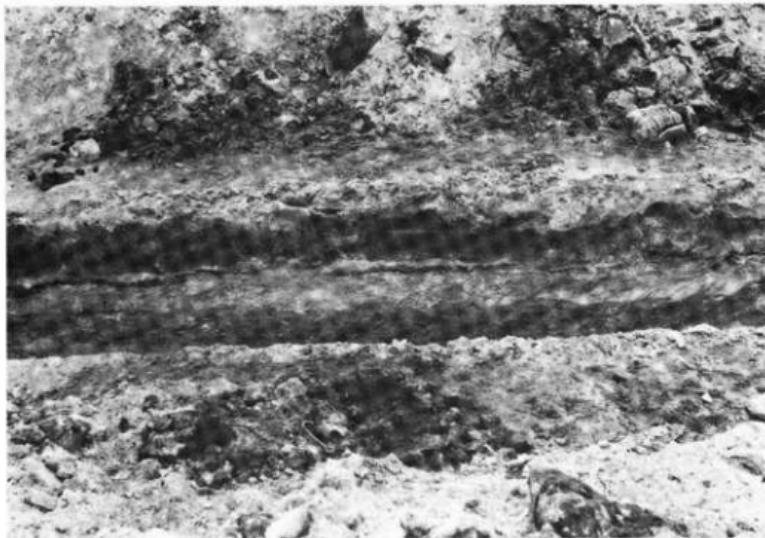


調査トレンチ景観（西より）

圖版第九 垂水南遺跡河道跡



河道2 土層斷面

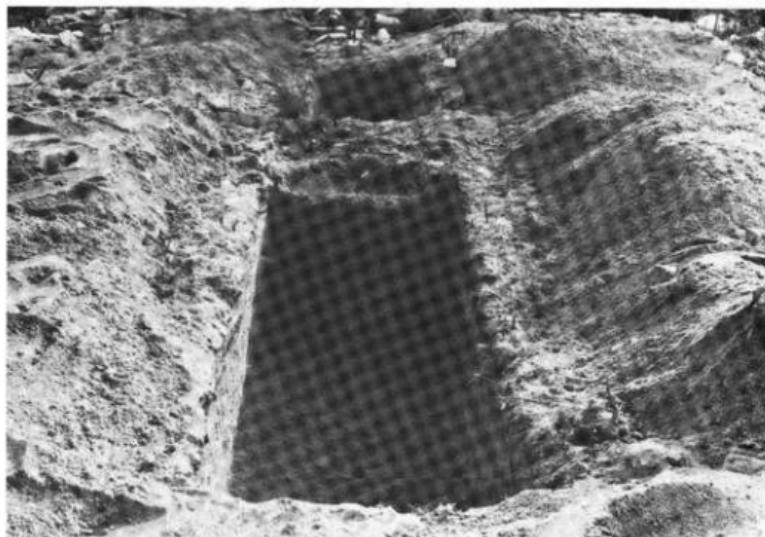


河道3 土層斷面

図版第一〇 垂水遺跡近景・試掘場



調査地点全貌（西より）



第4トレンチ（東南より）

〔昭和55年度〕  
埋蔵文化財緊急発掘調査概報  
(吉志郡遺跡・垂水南遺跡・垂水遺跡)

昭和56年3月31日

編集 吹田市泉町1丁目3番40号  
発行 吹田市教育委員会